萬葉集略解

五

柳田文庫
文庫11
A 104
9

萬葉集巻第五

雜歌

大宰帥大伴卿報凶問歌一首○筑前守山上臣憶良挽歌一首并短歌○山上臣憶良令反惑情歌一首并短歌○山上臣憶良思子等歌一首并短歌○山上臣憶良哀世間難住歌一首并短歌○大宰帥大伴卿相聞歌二首　答歌二首○帥大伴卿梧桐日本琴贈中衛大將藤原卿歌二首　中衛大將藤原卿報歌一首○山上臣憶良詠鎮懐石歌一首并短歌○大宰帥大伴卿宅宴梅花歌三十二首并序○思故郷歌二首○後追和梅花歌四首○遊松浦河贈答歌二首　蓬客等更贈歌三首　娘等更報歌三首○帥大

文庫11
A 104
9
柳田泉文庫
48 10647

伴卿追和歌三首○吉田連宜和梅花歌一首○吉田連宜和松浦仙媛歌一首○吉田連宜思君未盡重題二首○山上臣憶良松浦歌三首○詠領巾麾嶺歌一首○後人追和歌一首○最後人追和歌一首○最ゝ後人追和歌二首○書殿餞酒日和歌四首○聊布私懐歌三首○三島王後追和松浦佐容媛歌一首○大典麻田連陽春為大伴君熊凝述志歌二首○山上臣憶良和為熊凝述志歌一首并短歌（并ト通ノ誤）○貧窮問答歌一首并短歌○山上憶良好去好来歌一首并短歌○山上臣憶良沉痾自哀文一首○山上臣憶良悲歎俗道假合即離易去難留詩一首并序○山上臣憶良重病思兒等歌一首并短歌○戀男子名古日歌一首并短歌

雜歌

太宰師大伴卿報凶問歌一首　此報凶問ハ巻八ニ神亀五年大伴卿之妻大伴郎女遇病長逝焉とありて同じ時にて大伴郎女のまかれる後勅使よりて時の公卿の高人の許にとふらひなとせし時それに答へよまれしは大伴郎女のまかれるは我の妻の喪の袖ぬらすべくしは勅使よりにおもく酬報を使にたくひておくそのうへし巻三に神亀五年太宰帥大伴卿思戀故人歌とて挙たるも此かうしことをよめるにて此書牘は両君とあると稲君胡麻呂を指とい゙へる説あれど悲のうきて大伴て病多く稲君胡麻呂の太宰へ下りしは天平二年六月にて是よりは後のことなれば其説はあたらず依両君大助傾命纔継とあるは妻の喪の後又自ら病ありつくて京より勅使の下りしに報せしとせんもかなひなむ

禍ヲ今福ニ誤

さるやうにいひて年号おちたれはさらに何くれとなりしこの山同里集と
もいへる前君大助といへるゆゑ別にまなびしそれにてもきかべきものなし

禍故重疊凶問累集永懐崩心之悲獨流斷腸之泣但依
兩君大助傾命纔繼耳筆不盡言古今所歎　禍故ハ禍のこと

よりてことに、司馬相如諫獵書ニ出たる字也、崩心斷腸ハこゝろをいたま
しむることにて、前君ハ淡とし知がたし、傾命ハ年老てよはひかたぶける
をいふ、纔繼といへるハ大体ての自の病の急なるをいふ、筆不盡言ハ易繫
辭ニ書不盡言言不盡意とあるによりてつゞけたり

余能奈可波年奈之伎母乃等志流等伎子伊與余麻須萬
須加奈之可利家理

よのなかはむなしきものとしるときしいよゝますますかなしかりけり
知けしめしハしものなり

今丈ヲ大ニ兔ヲ免ニ誤

神龜五年六月二十三日

○この序と詩と歌目録にもみえたれどこゝに歌の落失せてあるなるべし

蓋聞四生起滅方夢皆空三界漂流喩環不息　四生ハ胎生卵
生濕生化生の四つをいふ、起滅ハ生死とおなじ、皆佛典に出たる字也、
方夢ハ荘子ニ方其夢也不知其夢也とあるによりてなり、三界ハ
欲界色界無色界の三をいふ、漂流ハその三界のうちにさそらひてまよ
ふことをいふ、環不息ハ越絶書ニ終而復始如環之無端とあるによりてつ
ゞくいふのきハまりなきよし

所以維摩大士在乎方丈有懐染疾之患釋迦能仁坐於雙
林無免泥洹之苦　維摩方丈の室にありて病を現ぜしことをいふ、能仁ハ釋
迦を漢語ニ譯せし語なり、こゝハ梵語を漢語ニ譯せし名なり、雙林ハ娑羅
雙樹林の事にて、釋迦の滅度をとげたる所也、泥洹ハ梵語也、これを漢語

にて譯して滅度といへり

故知二聖至極不能拂力負之尋至三千世界誰能逃黒闇之捜来

二聖は維摩と釈迦をいふ。至極は聖徳の至極をいふ。力負は荘子に藏舟於壑藏山於澤謂之固實然夜半有力者負之而走昧者不知也とあるをさして力負といへり。此荘子の語は死生の変化の逃がたきことをいへり。黒闇は涅槃聖行品に功徳大天黒闇といへる姉妹あり。功徳天は生をいひ、黒闇は死をいふとみへたり。ここは死の来り侵すことをいへるなり

二鼠競走而度目之鳥旦飛四蛇争侵而過隙之駒夕走

二鼠は瑯琊代酔編に佛書人有逃死者入井則遇四蛇傷足而不能下上攬則逢二鼠咬藤而不能升四蛇以喩四時二鼠以譬日月とあるを此すは賓頭盧説法経をさすなるべし。度目之鳥は人生のはやくさることを文選張景陽雑詩に人生瀛海内忽如鳥過目といへるより出たり

又四蛇は地水火風の四を四毒蛇にたとへ、人の身を四毒蛇のかはるがはる侵すにたとへること最勝王経に出たり。過隙之駒は光陰のはやくすぎさることをたとふ。是は荘子知北遊にみえたり

嗟乎痛哉紅顔共三従長逝素質與四徳永滅

紅顔素質は婦人のうつくしきをいふ。三従は大戴礼にみえて、女は親に従ひ夫に従ひ子に従ふのみなることをいふ。四徳は周礼礼記にみえたる婦言婦徳婦容婦功の四つをいふ

何圖偕老違於要期獨飛生於半路

偕老は毛詩にみゆる語にて、夫婦ともに老をむかふることをいふ。要期はかたくちぎりし契なり。獨飛は人の妻に別れしを李陵が詩にたとへいへり。半路は夫婦の契のまだなかばなることをいふ

蘭室屏風徒張斷腸之哀彌痛枕頭明鏡空懸染筠之涙逾落

蘭室は婦人の閨房をいふ。古人のことばの詩などにみえたり。屏風明鏡は婦人の身をはなれず用ひなれしものなれば、つまにおくれたるものゝ涙をそゝぐなり。染筠は

舜の死娥皇女英の二人舜を慕ひて其の涙にて竹を染ければ湘妃竹といふ
ここは其の涙竹のことをかりて涙落とせしを、箔は竹の斑なれば、一本に比擬て
節に化れりといふ意なるべし

泉門一掩無由再見嗚呼哀哉 泉門は黄泉の門をいふ。掩はとづるを

愛河波浪已先滅苦海煩悩亦無結従来厭離此穢土本願

託生彼浄刹 愛河は人情は愛に溺るゝ故河にたとへ、苦海は世間の苦しき
をさしていへり。仏典にある語也。無結といふ人死ては再び此世に生を結ばぬ
をいふ。穢土は此土をいひ、浄刹は浄土をいふ

日本挽歌一首 目録に筑前守山上臣憶良挽歌一首并短歌とあり
右の此ら文と詩はもろこしのふみにて日本にてよみ給ふ世の和歌の挽歌にあらねばにて

大王能等保乃朝廷等斯良農比筑紫國爾泣子那須斯多

おほきみのとほのみかどとしらぬひつくしのくにゝなくこなすした

比枳摩斯提伊企陀爾母伊摩陀夜周米受年月母伊摩他

ひきましていきだにもいまだやすめず年月もいまた

阿良袮婆許許呂由母於母波奴阿比陁爾宇知那比枳許

あらねばこゝろゆもおもはぬあひだにうちなびきこ

夜斯努禮伊波牟須弊世武須弊斯良爾石木乎母刀比佐

やしぬれいはんすべせんすべしらにいはきをもとひさ

氣斯良受伊弊那良婆迦多知波阿良牟乎宇良賣斯企伊

けしらずいへならばかたちはあらむをうらめしきい

毛乃美許等能阿禮乎婆母伊可爾世與等可爾保鳥能布

ものみことのあれをばもいかにせよとかにほどりのふ

多利那良毗為加多良比斯許許呂曽牟企氏伊弊社可利

たりならびゐかたらひしこゝろそむきていへさかり

伊摩須

いまそ

遠のみかどハ路遠し、朝ハ新の謂く、なくよきいハ泣子のめぐくいきづかふも

さくハ道をいそぎまかり息づかしくせきしきこえ、そハ妻の想ふよるしまがく

わかれしまかりをいそんとくかくいつかいまだあくわぞハあらぬよくんゆき

ハんよかも、おもわあひぐるハおのひらけたのさくぶちちひさくうて八角

のなきえ神とむ、とやしぬれ、紀るさるもなるら、七ころの木と五ころよりは八、

吐こころの家ハいでおわん、礼の下婆の字義なるなるべし、とやしぬれが

みくる死をいつへ、拾古紀曾洽太子の御家よ許夜勢麼諸能多比等阿波

礼、石木をしひさけたらをハ、四ろなかもいわなるべし、えよくれ語らくむ

くさめんと慨情地なれバわちたつらぶしく、室ちらとひさけハことひて是と

もらしやるきなるべしといへき、かくちハおんをハ室まちをかくらハ死尿とよ、

さくいへさのをいまそくこえハ葬送とひてそハ葬せぞしておくバせあく

尻なるとくおんみといふくといひ、妹のみことハよそあつ目く、父のみこと母の

みことをぞもいてよふとよもの枕詞、んとむきてハ背向く、世をそむくといふよ

同し

反歌

伊弊爾由伎弖伊可爾可阿我世武摩久良豆久都摩夜佐夫斯久於母保由倍斯母

いへにゆきて、いかにかあがせん、まくらづく、つまやさぶしく、おもほゆべしも

枕づく枕詞、つまやハ閨房をいふ、さぶしくハさびしく、おもほゆべしものしハ助辞、

先ハ葬送てかへるをいふのこゝろ、家ハ旅宿の彼といへり

伴之伎與之加久乃未可良爾之多比已之伊毛我已許呂乃須別毛須別那左

そらきよしかくのみつらぬきてひさしけむのこゝろのもくしてくべからず
はつきよしハちきやしと同じくきこえぬ詞、かくのみつらふハかくしまこと
なんのうらふく、ちへしきくへきさハせんかたなしいふとまをねいへるのし
久夜斯可毋可久斯良摩世婆阿乎爾與斯久奴知許等其
等美世摩斯毋乃乎
くやしかもかくしらませばあをによしくぬちことごとみせましものを
悔しきかもかくあらんと知りたらましかば之久老ハあきれよしハ古事記の
阿那迩夜志(アナニヤシ)と同じ事なく、妻をうつしみてくりける詞、國中(クヌチ)ハ筑紫
の國中之といへる、よりにまたこひらしと見えつるハ京のかたを來ける妻なる
をおもひよりとなるのしとして此の前、おもへのなんで、于久老あらき
老ありしとおよるべし、くぬちハ國中ことゝハ悉くく、萬十七もうる
このぬのくぬちこと許等其等とありて又同意を寫して有書ぬえま

うちふるをとゆきて越中までかぎらんとかねて知せばこの海のあちこちの
浪もみせましものをとよまれけるとも此ハおなじ
伊毛何美斯阿布知乃波那波知利奴倍斯和何那久那美
多伊摩陀飛那久爾
いものみしあふちのはなはちりぬべしわがなくなみだいまだひなくに
和名抄 楝 阿布智 ともあふちをせんだんといふなり、ならの家のあふち
をよめるなるべし、ちるよしの頃ハ五月の初めや
大野山紀利多知和多流和何那宜久於伎蘇乃可是爾紀
利多知和多流
おほのやまきりたちわたるわがなげくおきそのかぜにきりたちわたる
筑前御笠郡大野、おきそとハ息嘯(オキウソ)之、神代紀嘯之時(ウソブキニ)迅風忽起
とあるをいへり、又息を吹かけるをいふ、同紀に吹棄氣噴之狭霧(フキウツル イブキノ サギリ)とあり、

なげきしも息のおほく物を思ひて息のおくつのすといふ。大野山に立霧ハ
別れなげきのいつゝ、卷十三わがなげくやさかの歎、卷十五君が行
海べの宿に霧立たば吾立なげく息と知ませなどもよめり

神龜五年七月二十一日筑前國守山上憶良上　契沖云

憶良の妻のみまかりし時にかなしみ作れるを、大伴卿のある人によみて
せられし時憶良上とあるのといへり

令反惑情歌一首并序　是も目録に山上臣憶良とあり、これハ惑情
をさとして本情に返らしむる歌也

或有人知敬父母忘於侍養不顧妻子輕於脱屣自稱畏俗
先生意氣雖揚青雲之上身體猶在塵俗之中未驗修行得
道之聖蓋是亡命山澤之民所以指示三綱更開五教遣之
以歌令反其惑歌曰　宣長云知の上不の字脱たるか。畏ハ異の誤りといへり、

畏一本雖に作る。脱屣ハ履を脱すつるなり。史記に吾誠得如黄帝吾視
去妻子如脱躧耳とあるによれり、青雲ハ東方朔答客難に見えたり、
人の高きをいふ。盡ハ蓋の誤なるべしと宣長いへり。亡命ハ楊雄が解嘲に出
たる字也、身をはふらかしていづちともなくのがれ出るをいふ。三綱ハ君臣父
子夫婦をいふ。五教ハ父義母慈兄友弟恭子孝なるをいふ

父母乎。美禮婆多布斗斯。妻子美禮婆。米具斯宇都久志。余
ちゝはゝをみればたふとしめこみればめぐしうつくしよ
能奈迦波。加久叙許等和理。母智騰利乃。可可良波志母與。
のなかはかくぞことわりもちどりのかゝらはしもよ
由久弊斯良禰婆。宇既具都遠。奴伎都流其等久。布美奴伎
ゆくへしらねばうけぐつをぬぎつるごとくふみぬぎ
提。由久智布比等波。伊波紀欲利。奈利提志比等迦。何名

てゆくちふひとは。いちきよみて。なみてしひとの。なのな
能良佐禰。阿米弊由迦婆。奈何麻爾麻爾。都智奈良婆。大王
のらさね。あめへゆかば。なかのまに〳〵。つちならば。おほきみ
伊麻周。許能提羅周。日月能斯多波。阿麻久毛能。牟迦夫周
いますこのてらす。ひつきのしたは。あまぐもの。むかぶす
伎波美。多爾具久能。佐和多流伎波美。許斯遠周。久爾能
きはみ。たにぐくの。さわたるきはみ。きこしをすくにの
麻保良叙。可爾迦久爾。保志伎麻爾麻爾。斯可爾波阿羅慈
まほらぞ。かにかくに。ほしきまに〳〵。しかにはあらじ
迦

この

一本宇都久志の下遁路得奴(ノガロエヌ)兄弟(ハラカラ)親族(ウカラ)遁路得奴(ノガロエヌ)老見(オイミ)幼見(イトケミ)朋友(トモガキ)乃

言問交(コトトヒカハシ)の二十二字を此哥の序として見れば、文くはしかるべし。先
ぐは神代紀特鍾憐愛以崇養(メグシトオボスコヽロヲオキテ)とあり。此集には愍の字を用たり。不
負、めぐみといふ語もそれより出。うつくしは愛の字の意。父母をば崇めゐやまひ
孝養をつくし、妻子をば恵みいつくしむべく、世の中はかくのみ有べきこと
ことわりなるを、いへる。序にいへる三綱の中にても二綱をいへり。
もちどりの。枕詞。かからはしもよは、黐(モチ)にかかれる鳥のごとく、離れがたく、親
子がらとてのがれがたき理りをいふ。此句の下一句落たるか。うけぐ
つは穿(ウゲ)破れたる沓也。うけはうがれの約。字を一本に弊と作るは非也。宮ち
ぬ伎都流の都流は棄(スツル)之辞のつゞまれるなり。序文にいへる
脱屣のごとく、かろく妻子を棄るをいへり。ゆくちふはゆくといへる之。
如くなる人をいへるなるべし。かく世をかろくするは、石木よりなり
も生れ出たる人か。汝が名を名告れといへる。のらさねは、のれを延たる

こゝろよく践まし也、おのれゆつハこゝハ天へのぼる術をしゆるかバ汝が心のひかるよ
せよ、天も術をしゆるとも、つちにあるかぎりハ、地にある内ハ皇
おそしまけれ、このてらす日月の下ハ、天雲の下といふなし、天雲のむかふすきハ、
祈年祭祝詞白雲能墜坐(オリヰ)向伏(ムカフス)限(カギリ)、また谷蟆(タニグヽ)能狭(サ)度極(ワタルキハミ)るなどいひて、谷ぐゝハ蟾蜍にて、
ハ遠くゆかバひきゝふせるもくえゆるものなれバいへり、谷ぐゝハ蟾蜍にて、
し谷の草木の中をしも安く渡るなれバよめるなり、志かるバ若久且して下の
くを治るべけれど、古くハ勝とえらぬを清書にいひしとえゆ、さわる
るのさハ發語なり、こちかへるのくまぐまよでゆくをいへるを、白き
と若久よと冥する八天地の涯といはんがごとし、まこしまさハきこし
めさん此詞ハ上の大王いませてよるをかゝりて見べし、くふのおわらハ、京好
紀やまとハ區瑣能摩保邏摩(ホウマ)とあり、まハまことなるをいひて、ほハ下へて
称よつまれとかもしるすをいふ古語也、らハ助辞なり、されバ日本紀私記よ

し奥區也といへり、靈耶紀くにのまほらしよせよせける八国の秀ぞて、
まほらとハ具くほめきよふことハ欲しきるまをふさいあるゆのなき
ことみてハなきこのしけく、あしきものゝハ疑ふ須く、是ハ序文よいへる
釈様をとうつさえで、おのれ秘をさ言ふか、歌をとまるれてしづのう
表をさく称くみける人よ志らえされるなく

反歌

比佐迦多能阿麻遅波等保斯奈保奈保爾伊弊爾可弊利提奈利乎斯麻佐爾

ひさかたのあまぢハとほしなほなほにいへにかへりてなりをしまされ

なりハ業にて、なりハ生業十四きる業保利保乎とよまるべくしのれをしるす
なほなほやのあるまよへり、其くのこふわるまゝ、ちかるよいつるべく天よ至らんハ遠くなれバ、
家に帰りて業をせよとくるしくまさるハ土ませを延べ爾ハ孫の張ちるべし

思子等歌一首并序

釋迦如来金口正説。等思衆生如羅睺羅。又説。愛無過子。至極大聖尚有愛子之心。況乎世間蒼生誰不愛子乎

最勝王経ニ吾觀衆生無偏黨如羅怙羅又無過子唯不愛子乎
こゝろは如来ハ金身なれバ金口といへり羅睺羅ハ釋迦の子也

宇利波米婆胡藤母意母保由。久利波米婆麻斯提斯農波由。伊豆久欲利枳多利斯物能曾。麻奈迦比爾母等奈可可利提。夜周伊斯奈佐農

うりはめばこどもおもほゆ、くりはめばましてしぬばゆ、いづくよりきたりしものぞ、まなかひにもとなかゝりて、やすいしなさぬ

いづくよりきたりしハこの世のきたるの因縁ありてうまれこしそのこどもゝ、まなかひハ眼之間なり常に目のまへにちらつきて、やすいしなさぬのしハ助辞なり安く寝ることをいへる也伊遠斯那世ハ寝ることなり寝ることも旅寝するに常する子等が面をあらはしてさせぬなり面影にみえてゆるさぬといへり

反歌

銀母金母玉母奈爾世武爾麻佐禮留多可良古爾斯迦米夜母

しろかねもくがねもたまもなにせむにまされるたからこにしかめやも

此歌の意ハ世の人の子をおもひまどふ所は何の宝にもまされる也
る白玉のをしき事はいふまでもなし

哀世間難住歌一首并序

易集難排八大辛苦。難遂易盡百年賞樂。古人所歎。今亦及

之所以因作一章之歌以撥二毛之歎其歌曰　撥ハおしのぞき
のぞくるをいふ八大辛苦ハ生、老、病、死、愛別離、怨憎會、求不得、五陰盛の八を
いへり仏典に出。事ハ賞心楽事也。二毛ハ左伝に出たる字なり。老て白毛
の交りまじるをいふ。又潘岳が秋興賦序にも二毛を歎じたりといへり。
ハ天平五年に七十四歳なり。六十九歳の作なれバ秋興賦のことハ
左伝より出て老を歎く心をすへてよむべしとて二毛之歎といへ
るハ秋興賦のおもむきといへる

世間能周弊奈伎物能波年月波奈何流流其等斯等利都都伎意比久留母能波毛毛久佐爾勢米余利伎多流遠等
よのなかのすべなきものハとしつきハながるるごとしとりつづきおひくるものハももくさにせめよりきたる

咩良何遠等咩佐備周等可羅多麻乎多母等爾麻可志　或有
めらがをとめさびすとからたまをたもとにまかし
此句云、之路多倍乃袖布利可伴之久礼奈為乃阿可毛須蘇毘伎余知古良等手多豆佐波
よちこらとてたづさは
利提阿蘇比家武等伎能佐迦利乎等等尾迦禰周具斯野
りてあそびけむときのさかりをとどみかねすぐしや
利都禮
りつれ

年月ハ水の流るるがごとく去れバつぎつぎに追ひ来るやうな様
の愁の来るといふ。一そのなかより…八段
事要略に、浄御原天皇吉野宮におはしませし時神女の舞ひて
よめる歌、乎度綿度度茂邑度綿左備須茂可良多万乎多茂

、度迩麻岐底乎度咩佐備須茂といふうたをのせられど、神女のうたへる
といへるは彼の傳へにて、續紀天平十五年五月詔して五節の舞造らせたまへるうた
にもつかへまつらるゝはせられしなるべし。しかるは右の舞の歌に、からたまを
娘子進（ヲトメスサミ）とて、をとめのふるまひをいふこと也。まし（は）まきてと近ふる詞
よちこらは室生云同じ。まつはひの手を取りて、集千ヶ川に紐な洗ふを
なりしを余知古良（ヨチコラ）手多豆佐波利提（テタヅサハリテ）、集千六年ノ四千庭（ヨチコ）らをとりて同じといへり、
よろづさかりなるを、よくとくみ今いふごとしてあそびあるく、さかりの時の盛
をさへ、盛の時をとゞめかねて、やすくつれば、のこく、つれバのバと思ふなり。

みなのわたは例也

美奈乃和多迦具漏伎可美爾伊都乃麻可斯毛乃布利家
みなのわたかぐろきかみにいつのまかしものふりけ
武久禮奈爲能（一云 尓保奈酒）意母提乃宇倍爾伊豆久由可
むくれなゐの。おもてのうへに。いづくゆか志
和何伎多利斯（一云 都祢奈利之 恵麻比麻欲毘伎 散久伴奈能 宇都呂比尓家里 余乃奈可伴 可久乃未奈良之）
わかきたりし。

みなのわた、枕詞、いつのまにかその白髪生ひたるといひて、くれなゐのかほよ
いつよりか皺（シワ）掻垂（カキタリ）しといふなり。又何さらに、皺を用ゐれば、いづくゆの
皺がきたりしといふをおぼゆれど、古語の例にあらずて、一本の方のなるは、
老十三丹の條にもみづらもよみて、丹は丹のかほ、丹の頰ひてを秀（ホ）と
いへるなり。顔のいろ、ゑまひは笑（エミ）、まよびきは眉、さく花のめでたきを
といふ。こゝまでは女のうへのことをいふ

麻周羅遠乃遠刀古佐備周等都流岐多智許志爾刀利波
ますらをのをとこさびすとつるぎたちこしにとりは

咩ヲ呼ニ誤

枳佐都由美乎多爾伎利物知提阿迦胡麻爾志都久良宇
きさつゆみをたにぎりもちてあかごまにしづくらう
知意伎波比能利提阿蘓比阿留伎斯余乃奈迦野都禰爾
ちおきはひのりてあそびあるきしよのなかやつねに
阿利家留遠等咩良何佐那周伊多斗乎意斯比良伎伊多
ありけるをとめらがさなすいたどをおしひらきいた
度利與利提摩多麻提乃多麻提佐斯迦閇佐禰斯欲能伊
どりよりてまたまでのたまでさしかへさねしよのい
久陁母阿羅禰婆多都可豆恵許志爾多何禰提可久由既
くだもあらねばたつかづゑこしにたがねてかくゆけ
婆比等爾伊等波延可久由既婆比等爾邇久麻延意余斯
ばひとにいとはえかくゆけばひとにゝくまえおよし

遠波迦久能尾奈良志多摩枳波流伊能知遠志家騰世武
をばかくのみならしたまきはるいのちをしけどせん
周弊母奈斯
すべもなし

をとこさびハをとこあさびをおして男遊之、さつ弓ハ幸弓とかく、幸将の
幸るべし、幸之、志づくらハ和名抄 鞴之太久良 とあり、下づ鞍之、物具装束抄
切付鞍 弓下 小豹 以て及四位用之 云く、あそびあるきしてハ句之、よのなかやつ
ねにありけるハ世中ハ常にハあらざりけるを云、こゝにて又切れたるなり
あらねどもいふべきのりしさなすとてハ板戸をハさハ書て同じく発語なるべき
ハ令鳴之、古事記ハ八千矛神のところに 遠登賣能那須夜伊多斗遠 とて
いふて令鳴といふ即戸を閉るよしを書のいつは、古人への戸ハ多く開き戸なく、
開のまゝ鳴るべしと聞えいへりしも是と同じ、まだふたの云ハ、

今何母二字ヲ脱

うるはしきものとさしかへしめるさまなり、こゝもハまたまてのことの麻多麻傳
多麻傳佐斯麻岐とあるにおなじ、繼體紀にまきさくひのつまでをとおし
開きゝ、いもがてをとられまのしめわがてをハいもがまのしめんといひと
まきもがら、さねしのさハ上に同じく發語、いくだもあらねばハいくばくも
あらぬなり、たつかの杖ハ手束に同じく手に握る杖といふ、こしにたがね
てハ腰をかゞめて杖に倚りかゝるさまなり、てあるハいとあはれ也、礼と云を通していふ
かくまでも同じくれよしをバ老し人をバとりあつかふ也、契沖がいへるによるべし、此句老べし、かく
おもやうなからん、およそハ之と契沖がいへるによるべし、此句考へし、かく
のごとくなりしハ世の人ハかくのあくのものぞおもしろし、たまきはる抱何、
命をしけどハをしなれどもの意

反歌

等伎波奈周迦久斯母何母等意母閇騰母余能許等奈禮

婆等登尾可禰都母

ときはなすかくしもがもとおもへども、よのことなれバとゞみかねつも
こゝに斯母の下何母の字脱たる、拾穂本に何母の字あるハさる本ありしなるべし、ときはなすハ常磐のごとくに、とゞみハとゞめに同じもハ助辭

神龜五年七月二十一日於嘉摩郡撰定筑前國守山上憶良

(ヽ)目録に大宰帥大伴卿相聞歌二首答歌二首とあり、ここにあげて書牘のあるに就てあ
きらかにも叙ぶるしるかの旅しなりしん

伏辱来書具承芳旨忽成隔漢之戀復傷抱梁之意唯羨去留無恙遂待披雲耳

隔漢ハ牽牛織女の銀漢を隔てあるといふ、抱梁ハ尾生といへるもの女と梁下に約せしに女来らずして水いたり
ければ抱梁而死といへるものあるなる、荘子などの書に多く見ゆ、羨ハ冀の

謡ふし楽中にてかきまるべし。披雲ハ雲の楽廣がるを若披雲霽西観
青天とつゞけるそのことより人にまさるをさることしいへり。
①先ハ大伴旅人てより京にある人の旅人ニ家を贈られし時京の人の名ぞ
そのし書牘あるを旅人てよりその贈答をし後に一つならみにも記せりなのに
来る淡等とあるハ旅人てのなまで、穣我妹子（イモコ）を因高にせりかさね記しく、
淡等かくたびとよむべしそしハけてく亂されしなれ、このを見るにはじめ
二首ハ旅人て、次の二首ハ京人の答歌なれバそのあきらか此ら贈牘の御の答歌
すへし多都能馬母のあし宇豆都仁波のなしくに、此和大伴淡等謹状
とるべし、さて太の伏厚来書とくの書牘あるくにかなみに多都乃麻乎
の二首し多陀尓阿波須のまなるく、ま紀書の名まべきことのみ

歌詞両首　太宰帥大伴卿

多都能馬母伊麻勿愛豆之可阿遠爾與志奈良乃美夜古

爾由吉帝己牟丹米

たつのまもいまもえてしがあをによしならのみやこにゆきてこんため

周礼凡馬八尺以上為龍といへるを参考るべし。日本紀集宴事に十つき　あらうり

八つをとこゆるくつのこまをよみて

宇豆都仁波安布余志勿奈字奴波多麻能用流能伊昧仁
越都伎提美延許曽

うつゝにはあふよしもなしぬばたまのよるのいめにをつぎてみえこそ

いめとハ夢を、…そハ…

答歌二首

多都乃麻乎阿禮波毛等米牟阿遠爾與志奈良乃美夜古
邇許牟比等乃多米

たつのまをあれはもとめんあをによしならのみやこにこんひとのため

あれハ吾之、多米乙、本多仁よそし一首ニ依く改つ

多陀爾阿波須阿良久毛於保久志岐多閑乃麻久良佐良
受提伊米爾之美延年

たゞあひてあらくもおほくしきたへのまくらさらずてゆめにみえん

たゞちに逢ざる月日の多かる之、おほくハあるを延て、おもてにハ秋去らで
夢にのみ見えんと嬉しきに、夢にのみ見えんとぞ願つるをよめるなり、於
保久の久ハ之の誤なりんと宣ちいつ

大伴淡等謹状

○同家ニ帥大伴卿梧桐日本琴贈ニ中衛大将藤原卿一歌二首とこ前後
の例によるふしこそ記きなしの落しなりん

梧桐日本琴一面 對馬結石山孫枝也

雅楽式云和琴一面長六尺二寸とあり、
結石を仙覚いふしとよめり、孫枝ハ嵆康琴賦ニ乃劉孫枝准量所

注、白氏文集ニ梧桐老去長孫枝とあり、又書十八韻の序ニ孫枝もいつく
しくあり、枝の下也のなし、本ニよりてなく称へり

此琴夢化娘子曰、余託根遥島之崇巒、晞幹九陽之休光、

琴賦ニ椅梧之所生兮託峻嶽之崇岡云く、また且晞幹於九陽云く、また
吸日月之休光ともかくなり、崇巒ハ高きみね也、九陽ハ王逸が楚
辞の注に、九陽謂九天之涯也とあり、また文選の注にハ九ハ陽数也、陽日也と
もいへり、休光ハ注に休ハ善也とあり、よきひかりといふこと

長帯煙霞逍遥山川之阿、遠望風波出入雁木之間、荘子ニ
荘周山に入て、大樹の茂りたる下を杣人のとらずなからしたるを見て
用ゐるまことなんといへり、かくて荘周此木の不材なるをもて天年を終るを
さとあれて、山を出て人の家に宿りしに、雁をところして京なるこころの
よろこびをてがるきわろきをころせり、かくてまるきことのよくても

ちとせを経ざるうちにと知れたりといふ意なり、不材人とは人にまじらるまじきやうなる人といふべきやの例に出入せしといふことぞ

唯恐百年之後空朽溝壑偶遭良匠散為小琴不顧質麁音少恒希君子左琴即歌曰

溝壑は孟子の字なりしは谷などのことをいふ、左琴は古列女伝楚の於陵子終が妻のいへることに左琴右書、楽在其中とあるによりてなり

伊可爾安良武日能等伎爾可母許恵之良武比等能比射乃倍和我摩久良可武

いかにあらんひのときにかもこゑしらんひとのひざのへわがまくらかん

二の句はいつの時いづれの日にといふこと、おとしらん人は伯牙などの琴をひきしとき鍾子期よく聴きしといふ故事なり、ひざのへは膝上也、枕かんは枕せんといふ事、巣井掛くづき、又かづらうんともあれば、かんは詞にして枕せんといふ

同じ歌を六帖にはまくらせんとありて載せたり

僕報詩詠曰

詩は謌と一なれど此はその和歌をいふ、又歌を七五七言を詩といへるなり

許等等波奴樹爾波安里等母宇流波之吉伎美我手奈禮能許等爾之安流倍志

こととはぬきにはありともうるはしききみがてなれのことにしあるべし

そのうちある本にはあれどもうるはしき人の手なれとて琴となりてあらんとぞ

琴娘子答曰

敬奉徳音幸甚幸甚片時覺即感於夢言慨然不得默止故附公使聊以進御耳

これ琴の答にて此下は作者の詞也

謹状不具

右二その歌と別紙にかくあれども、ここは書牘の文の中につづけてかくべし

なるべし、琴娘子を首口といへるも、この本敍のなくなるにてこれは誤れるなり

天平元年十月七日附使進上

謹通中衛高明閤下謹空　續紀に神龜五年八月置中衛府、ここ

また公卿補任に大同二年四月廿二日改近衛為左近衛、改中衛為右近衛と

見えたり。閤は閣の誤也。謹空は敍詞なるべし。後世左白などいふ類にて、おなじく書簡の末を白くあけおく

しるしを致すなるべし。これらは此書簡の書様をまねべて、から人のかくさまなり。文粋などにも見ゆ

○目録に中衛大将藤原卿報歌一首とあり。こは歌の前にありて

簡の、又おのが書牘の敍に此返書のかしこみをのべたり。この

跪承芳音嘉懽交深乃知龍門之恩復厚蓬身之上戀望殊

念常心百倍謹和白雲之什以奏野鄙之歌房前謹状　龍門は

後漢の李膺が門に入るべきを龍門にのぼるとたとへつる

入ることをいへり。ここは大伴にさしていへるなり。蓬身は

毛詩自伯之東首如飛蓬といふに依りて、蓬身とはわが身をいへり。蓬身にを

また白雲は白雪の謡なるべし。文選宋玉が楚王の問に答ふる文に白雪之

什とみゆ

許等騰波奴紀爾茂安理等毛和何世古我多那禮乃美巨

騰都地爾意加米移母

ことゝはぬきにはありともわがせこがたなれのみことつちにおかめやも

みことは御琴也。琴人にてとありて、こと〳〵は御琴也。移は神功紀儛人尓波移ろ

て移の字の借字に私記野とよめり。また欽明紀官家を弥移居とよみて、

みやけと移をやの字に用ゐる證也

十一月八日附還使大監　大監は大伴宿祢百代也。巻三巻四にもみゆ

謹通尊門　記室　尊門は人を尊称する語也

○目録に山上臣憶良詠鎮懐石歌一首并短歌とあり。これも歌のさきに

楷ヲ随ニ誤
壁ヲ璧ニ誤

落しなるべし

筑前国怡土郡深江村子負原臨海丘上有二石。 こゝにおきつ

布可延のうみかミの故布のはらなる

大者長一尺二寸六分。圍一尺八寸六分。重十八斤五兩。小者長一尺一寸。圍一尺八寸。重十六斤十兩。並皆楕圓。狀如雞子。其美好者不可勝論。所謂徑尺璧是也。或云此二石者肥前国彼杵郡平敷之石、當占而取之

今ノ權衡 二十四銖為兩、之兩為大兩、十六兩為斤、義解小以秬黍中者百黍重為銖、廿四銖為兩とす、楕まるく楕をも代る字也他果及圓而長者曰楕とす、徑尺ハ淮南子に聖人不貴尺之璧とあるより出て大なる玉と云之徑子平敷とす八地名か又地の名とするやとこそや、平一本手とす、筑前風土記、見饗食石、怡土郡とこ一顆長一尺二寸太一尺重卅一斤、一顆長一尺一寸太一尺重卅九斤とあり

去深江驛家二十許里。近在路頭。公私往来莫不下馬跪拜。

古老相傳曰。往者息長足日女命征討新羅國之時。用茲兩石挿著御袖之中。以為鎮懷。實是御裳中矣 所以行人敬拜此石。乃作歌曰

神功紀に既而皇后とく躬欲西征、于時也適當皇后之開胎、皇后則取石挿腰祈之曰事竟還日産於茲土、其石今在于伊覩縣道邊とあるをも、怡土郡ハ仲哀紀筑紫ノ伊覩縣主祖五十迹手とあり鏡劔を天皇にたてまつるとて、天皇五十迹手を美めまして、伊蘇志とのたまひしより、五十迹手が本土を伊蘇国と云今伊覩といふハ訛よしあり

可既麻久波阿夜爾可斯故斯多良志比咩可尾能彌許等
かけまくはあやにかしこしたらしひめかみのみこと
可良久爾遠武氣多比良宜弖彌許々呂遠斯豆迷多麻布
からくにをむけたひらげてみこころをしづめたまふ

等伊刀良斯呂伊波比多麻比斯麻多麻奈須布多都能伊
といふらしていはひたまひしまゝまなこふたつのい
斯乎世人爾斯咩斯多麻比呂余呂豆余爾伊比都具可禰
しをよのひとにしめしたまひてよろづよにいひつぐがね
等和多能曽許意枳都布可延乃宇奈可美乃故布乃波良
とわたのそこおきつふかえのうなかみのこふのはら
爾美豆可良意可志多麻比呂可武奈何良可武佐備伊
にみづからおかしたまひてかんながらかんさびい
麻須久志美多麻伊麻能遠都豆爾多布刀伎呂可僘
ますくしみたまいまのをつゝにたふときろかも
むけらひらけ段玉いふらしてのいは發後まくおせらまひしといき
ひらきひしは神よう久ひませしなすを以ふ、まむたれはき宝のめぐくし

いひつぐかねのがねの後既出、万代まで言継ん為なりとのことゝ、わたの底
枕詞、地名の際にて奥深きをいひかけたり、うなかみハ地名にハあらず、序
に際海丘上とある所をいふの、こふの原序にいへる地名也、紀に伊覩の道
の邊といへる所なるべし、たましまひてハ置うせなまひてなくしみたまハ
神代紀に奇魂をくしみたまと訓よくしハあやしきこと、神功紀に和魂ハ王
身に志たがひ荒魂ハ先鋒としてといへるなるを、此二つの石のゆゑにいひ
なせるにや、みたまハ玉といへるにや、ほむる詞也、とてハ現也、たふときろも
のろハ助辞なり、皇極代とかいへる仁徳紀に介辞古旮呂介茂(カシコキロカモ)とも見ゆ
阿米都知能等母爾比佐斯久伊比都夏等許能久斯美多
麻志可志家良斯母
あめつちのともにひさしくいひつげとこのくしみたまじけらしも
又哥ハ玄紀も元年世に語伝へよとの詠みなり、此弥玄の石を數(ニカ)しけ

らしとりて、おのつから然の然の名ハ世に並ひなくきこゆる一つの称となれるよし也

いへり

右事傳言那珂郡伊知郷蓑島人建部牛麻呂是也

こハ右の石の足すまてとは人のことをききたるやうにかきなせし也

梅花歌三十二首并序　同諸子大宰帥大伴卿宅宴梅花云々とあり

天平二年正月十三日萃于帥老之宅申宴會也于時初春令月氣淑風和梅披鏡前之粉蘭薫珮後之香加以曙嶺移雲松掛蘿而傾蓋夕岫結霧鳥對縠而迷林庭舞新蝶空歸故雁

帥老ハ大伴卿を云此序ハ憶良の作れるならんと契沖いへりさもありぬべし、鏡前之粉ハ宋武帝の女寿陽公主の額に梅花の落たりしが拂へども去ざりしより梅花粧といふことおこれりといへるによりていへり、珮後之香ハ屈原がうたによりていへり、傾蓋ハ松を偃蓋などいふよりいへり、以後の語も多し、

帥ヲ師ニ誤

蘿而ヲ羅勿ニ誤

對縠ハ宋玉神女賦に動霧縠以徐歩とある、縠ハうすものにて、あやぎぬのうすきをいふ

霧を縠にたとへ縠を霧にたとへていへるなり、契沖ハ對ハ封の誤ならんといへり

於是蓋天坐地促膝飛觴忘言一室之裏開衿煙霞之外淡然自放快然自足若非翰苑何以攄情請紀落梅之篇古今夫何異矣宜賦園梅聊成短詠

劉伶酒徳頌に幕天席地といへることとおなじく蓋天坐地といへり、促膝ハ梁陸倕が詩に、促膝豈異人、注に促近膝坐也といへり、飛觴ハ西京賦に羽觴行而無算、注に羽觴作生爵形とて、忘言ハ荘子に言者所以在意得意而忘言とあるより出て、かくていふなる語なりけるをとりて、さて蘭亭叙に語言一室之内とあるにならへる也、此序ハ始のあたりよりしてすべてこの叙をまなびてなり、開衿ハ胸襟を開などいふもひらくことをいふなり

武都紀多知波流能吉多良婆可久斯許曾烏梅乎乎利都

忘ヲ忌ニ誤

都多努之岐乎倍米　大貳紀卿
むつきたちはるのきたらばかくしこそうめををきつゝたのしきをへめ
まごとにもあらぶんかくしのしは助辞またかくこそ〻楽きをへめは楽しと
きはめんといふことん卷十九にもうちの楽しき終へばとよめるも左に大貳紀
のうのたのしきをつめとりてたのしきをへめるらんをとふべくべし
大貳は太宰府の住なれど三位の人を任せし故卿とかけるらん
烏梅能波奈伊麻佐家留期等知利須義受和我覇能曽能
爾阿利己世奴加毛　少貳小野大夫
うめのはないまさけるごとちりすぎずわがへのそのにありこせぬかも
須義をと須紫とあるは義の字を誤れる也わがへは我家の略也
こせぬかもは在こせぬと願ふ詞ぬかもは助詞小野大夫は小野老也
烏梅能波奈佐吉多流僧能能阿遠也疑波可豆良爾須倍

久奈利爾家良受夜　少貳粟田大夫
うめのはなさきたるそのゝあをやぎはかづらにすべくなりにけらずや
集中ねをかづらにかくるとあるあまたみゆ
波流佐禮婆麻豆佐久耶登能烏梅能波奈比等利美都都夜波流比久良佐武　筑前守山上大夫
はるさればまづさくやどのうめのはなひとりみつゝやはるひくらさむ
見つゝやは見つゝやはの意山上ち氏は憶良也
余能奈可波古飛斯宜志恵夜加久之阿良婆烏梅能波奈爾母奈良麻之勿能怨　豊後守大伴大夫
よのなかはこひしげしゑやかくしあらばうめのはなにもならましものを
こひしげは恋しきこと しゑやはうらやましと云ふ同じくよしやよし宜しは借字
のかなればその語ふくらしきなりんと爲はいそれぞれ宜しき（シゲ）繁しの意也

こゝろやハ心の志ざさるまゝを数ふる詞といふ、かくあらバのしハ助辞、かく
世の中に恋しくハ非情の梅とならんをとく、これハちるまでの昧るごとを恋ふるらんよ
見なれるなくんば其の身もおくれなくながらふともみその花のあへぬも
ならましものと、大伴大夫ハ三依なるべし

烏梅能波奈伊麻佐可利奈理意母布度知加射之爾斯弖
奈伊麻佐可利奈理　筑後守葛井(フヂヰ)大夫

うめのはないまさかりなりおもふどちかざしにしてないまさかりなり

おもふどちハおもふ友どちといふ〳〵しるハしたしきの意、葛井大夫ハ大成之

阿乎夜奈義烏梅等能波奈乎遠理可射之能弥弖能知波
波知利奴得母與斯　笠(カサ)沙彌

あをやなぎうめとのはなををりかざしのみてのちはちりぬともよし

梅柳をも折て酒飲めての後ハ花ハ散るともよしといふ、沙弥ハ満誓人のなるべし

家ハ我ノ誤

和何則能爾宇米能波奈知流比佐可多能阿米欲里由吉
能那何列久流加母　主人

わがそのにうめのはなちるひさかたのあめよりゆきのながれくるかも

集中降を流るといへる様人てえ

烏梅能波奈知良久波伊豆久志可須我爾許能紀能夜麻
爾由企波布理都々　大監大伴氏百代

うめのはなちらくはいづくしかすがにこのきのやまにゆきはふりつゝ

ちらくハちるを延ていふ、しかすがハしかしながら、さすがなどの語也、
きの山ハ筑前下座郡三城、また城山ともいへり、ことなるをいへる日
ド不なし

烏梅乃波奈知良麻久怨之美和家曽乃乃多氣乃波也之
爾于具比須奈久母　少監阿氏奥島(オキシマ)

家ハ我ノ誤

うめのはなちらまくをしみわがそのゝたけのはやしにうぐひすなくも

家ハ家の字なるべし誤れるならん次もおなじ、花の散を惜みて鶯鳴也、

もハかもといふに同じ、阿氏ハ阿倍氏か

烏梅能波奈佐岐多流曽能能阿乎夜疑遠加豆良爾志都

都阿素毗久良佐奈　少監土氏百村

うめのはなさきたるそのゝあをやぎをかづらにしつゝあそびくらさな

くらされハくらさんに、土師氏之

有知奈毗久波流能也奈宜等和家夜度能烏梅能波奈等

遠伊可爾可和可武　大典史氏大原

うちなびくはるのやなぎとわがやどのうめのはなとをいかにかわかん

うちなびく枕ね、家ハ我の誤く、柳と梅といづれまさるとおもふらんと

史氏ハ史部氏之

岐ヲ波ニ誤

久良ノ上ニ佐ヲ脱

波流佐禮婆許奴禮我久利豆宇具比須曽奈岐豆伊奴奈

流烏梅我志豆延爾　少典山氏若麻呂

はるさればこぬれがくりてうぐひすぞなきていぬなるうめがしづえに

こぬれがくりハ木闇隠(コノクレカクレ)なり、木陰に隠れて、いぬるのにハ去ぬ、香がしづえハ

とりて為ハいふれき、宣しきこゝれハ木まくいぬなるハ往なるに、て花の枝ハ

梅の末の指まく梅の下枝に居る鶯の梅の指へかくれていぬると云く

いへり、打考べし、山口忌寸若麻呂之

比等期等爾乎理加射之都都阿蘇倍等母伊夜米豆良之

岐烏梅能波奈加母　大判事舟氏麻呂

ひとごとにをりかざしつゝあそべどもいやめづらしきうめのはなかも

岐ハ波を誤れり、一本によりて改つ、舟一本丹とも、丹氏ハ丹治比氏か

烏梅能波奈佐企弖知理奈婆佐久良婆那都伎弖佐久倍

能下波ヲ婆二誤

久奈利爾弖阿良受也　藥師張氏福子

うめのはなさきてちりなばさくらばなつぎてさくべくなりにてあらずや

さて久良のと佐の字を落せり、尾張氏なるべし

萬世爾得之波岐布得母烏梅能波奈多由流己等奈久佐吉和多流倍子　筑前介佐氏子首

よろづよにとしはきふともうめのはなたゆることなくさきわたるべし

さて波奈の波を婆とかけるは誤れるなれば改つ、きにすてハ来り行ることもあり、

佐伯氏之

波流奈例婆宇倍母佐枳多流烏梅能波奈岐美乎於母布得用伊母禰奈久爾　壹岐守板氏安麻呂

はるなればうべもさきたるうめのはなきみをおもふとよいもねなくに

さるればこゝをみて咲るる梅の花とよみて給ひば悪といねざ

字に云ふに袖の字を書ては梅をさしていへり、板一本掻子化なるとよりしとあり

烏梅能波奈乎利弖加射世留母呂比得波家布能阿比太波多努斯久阿流倍斯　神司荒氏稲布

うめのはなをりてかざせるもろひとはけふのあひだはたぬしくあるべし

得志能波爾波流能佼多良婆可久斯己曽烏梅乎加射之弖多努志久能麻米　大令史野氏宿奈麻呂

としのはにはるのきたらばかくしこそうめをかざしてたぬしくのまめ

卷十九云の注に、毎年謂之等之乃波とあり、のまめハ酒飲んと云、小野氏なるべし

烏梅能波奈伊麻佐加利奈利毛毛等利能己恵能古保志枳波流岐多流良斯　少令史田氏肥人

うめのはないまさかりなりもゝとりのこゑのこひしきはるきたるらし

かとりハ百鳥也、こひしきハなつかしき也、舒明紀きさみの姑窶之枳舸羅爾

ちて〳〵みてよめ、巻十一にある肥人をうまびとゝよめり、田口氏ハ田邊氏の

波流佐良婆阿波武等母比之烏梅能波奈家布能阿素毗爾阿比美都流可母　薬師高氏義通

はるさらばあはむともひしうめのはなけふのあそびにあひみつるかも

梅の花まきちらしとよめりし、高橋氏の

烏梅能波奈多乎利加射志弖阿蘇倍等母波家布爾志阿利家利　陰陽師礒氏法麻呂

うめのはなたをりかざしてあそべどもあきたらぬひはけふにありけり　礒部氏なるべし

波流能努爾奈久夜汙隅比須奈都氣牟得和何弊能曾能爾汙米何波奈佐久　筭師志氏大道

はるののになくやうぐひすなつけむとわがへのそのにうめがはなさく

世に鶯をまちあの花にちかつけんとて梅のさくよめる　志紀氏の志斐氏の

烏梅能波奈知利麻我比多流乎加肥爾波宇具比須奈久母波流加多麻氣弖　大隅目榎氏鉢麻呂

うめのはなちりまがひたるをかびにはうぐひすなくもはるかたまけて

ちりまがひハ散乱ふ、をかびハ岡邊也、はるかたまけてハ春方向也、方ハべとよむ同じ、片設と書、根ちなゆれどかむてりし、まふハそのくあまれバむつかしよむべし

波流能能爾紀利多知和多利布流由岐得比得能美流麻提烏梅能波奈知流　筑前目田氏真人

はるののにきりたちわたりふるゆきとひとのみるまでうめのはなちる

野とあく奴といへされとかくかやうにかゝるも和しくよみけれバ野の、恐ハしいへるハ、巻十太山の霧が遂へるをさしてよめり、田口ハ矢田部氏か

波流揚奈宜可豆良爾乎利志烏梅能波奈多禮可有可倍

志佐加豆岐能倍爾　壹岐目村氏彼方

はるやなぎかづらにをりしうめの花たれかうかべしさかづきのへに

今本初句奈那とある一の那ハ衍字なれバ除きつ。本有倍志とあれど

一本有の下可の字あれど、かづらにせんとておりし梅を誰か盃の上に

うかべしといふ心、さるやうぎハかづらの梅花のさまと云ちがへり

于遇比須能於登企久奈倍爾烏梅能波奈和企弊能曽能爾佐伎弖知留美由　對馬目高氏老

うぐひすのおときくなべにうめの花わぎへのそのにさきてちるみゆ

便なき句ながら鶯の声きかせぬ里なしといふなへハ並みる之

和家夜度能烏梅能之豆延爾阿蘇毗都都宇具比須奈久毛知良麻久乎之美　薩摩目高氏海人

わがやどのうめのしづえにあそびつゝうぐひすなくもちらまくをしみ

家ハ家の誤なるべし、鶯の梅の花をもとめて鳴くといふ心

宇梅能波奈乎理加射之都都毛呂比登能阿蘇夫遠美禮婆弥夜古之叙毛布　土師氏御通

うめのはなをりかざしつゝもろひとのあそぶをみればみやこしぞおもふ

都しのしハ助辞、みやこハ都をいふ、御通ハ御道水通とも人なるべし

伊母我陛邇由岐可母不流登弥流麻提爾許許陀母麻我不烏梅能波奈可毛　小野氏国堅

いもがへにゆきかもふるとみるまでにこゝだもまがふうめのはなかも

妹が家く、こゝだハそこばくと同じ

宇具比須能麻知迦弖爾勢斯宇米我波奈知良須阿利許曽意母布故我多米　筑前掾門氏石足

うぐひすのまちがてにせしうめの花ちらずありこそおもふこがため

まちがへてハ稚雛くせしまく稚ふねしくこそへハ新たの詞ハ、おかをさハ女といつかえ
せまりしく林も之門部氏の

可須美多都。那我岐波流卑乎。可謝勢例杼。伊野那都可子
岐。烏梅能波那可毛　小野氏淡(タン)理

かすみたつながきはるびをかざせれどいやなつかしきうめのはなかも
い本那我の下の比ハ衍字なれハ除きつ

貞外思故郷歌両首　右のおもひくの二の句のいつをさらく見あしくせむ
憶良の名のよしの人哥　貞外二字同録ニ見

和我佐可理。伊多久久多知奴。久毛爾得夫。久須利波武等
母。麻多遠知米也母

わがさかりいたくくだちぬくもにとぶくすりはむともまたをちめやも
くもにとぶくすりハ、齢のかさなりてゐるとよりて、すまをたる薬ハ淮南王

劉安の仙薬の臼にあまりしを鶏犬がなめて天へのぼりしといふ故事
をいへり。遠知めやもハ落めやもとよめるハ誤也。落ハ於知のかなくだりつゝ
翁のいへるく遠知ハ若変るといふよしハそのへ考べし。二つをとなれわかゞへる
ことなる附ハやゆしいまれきもとに遠知とハ初めの身へかへるとこゝに
若十七歳のもとのまゝに数れも乎知(ヲチ)かへりてまたハ磨の初めの身へ帰りまゝと
いふをけ我やうるかへりてとは伊也乎知まさけ、又ハ初めへ返りもしくて
青度もさけん、又あるは倍しきての名の乎知かへりしてハ袖の身へ
又返りまくゆるくさて老たる人の身のかへるをいふ、初め人返るまし
くの又をちかへもハあがるべきうへまなく、此の名れをもちぬべしハ是
ひくるぞしことす

久毛爾得夫。久須利波牟用波。美也古弥婆。伊夜之吉阿何
微。麻多越知奴倍之。

くもにとぶくすりはむよハみやこみバいやしきあがみまたをちぬべし

よはハよりハのこと也、仙薬をくらはんよりハ、都しき君ニハ都のめでたき

をみバ、鬼ちゝよ若かへるべしとよめるなり

後追和梅歌四首　おなじのつぎをとりてよめるにて、怪良のあたるべし

能許利多流由棄仁未自列留烏梅能半奈半也久奈知利

曽由吉波氣奴等勿

のこりたるゆきにまじれるうめのはなはやくなちりそゆきはけぬとも

雪ハ消ぬとも、花ハちることなかれと也

由吉能伊呂遠有婆比乞佐家流有米能波奈伊麻左加利

奈利彌年必登母我聞

ゆきのいろをうばひてさけるうめのはないまさかりなりみんひともがも

和我夜度爾左加里爾散家留年梅能波奈知流倍久奈里

奴美年必登聞我母

わがやどにさかりにさけるうめのはなちるべくなりぬみむひともがも

なりぬ年梅とよみ八字梅の種なるべし、梅をむめといへる例集中におほし

烏梅能波奈伊米爾加多良久美也備多流波奈等阿例母

布左氣爾于可倍許曽

うめのはないめにかたらくみやびたるはなとあれおもふさけにうかべこそ

一云　伊多豆良爾阿例乎知良須奈左氣爾于可倍己曽

いめハ夢也、みやびハ都びにて風流のことをいふ、あれもおもふハ吾思ふ也、梅の

花の夢にかたりて風流の花と思へ

遊於松浦河序

卿ヲ御ニ誤

余以暫往松浦之縣逍遥聊臨玉島之潭遊覧忽値釣魚女子等也。

神功紀ニ夏四月北到火前國松浦縣而進食於玉島里小河之側、因以挙竿乃獲細鱗魚時皇后曰希見物也故時人號其處曰梅豆羅国、今謂松浦訛焉、是以其国女人毎當四月上旬以鈎投河中捕年魚於今不絶、唯男夫雖釣不能獲魚とみゆ

花容無雙光儀無匹開柳葉於眉中發桃花於頬上意氣凌雲風流絶世。

文鏡秘府論ニ引る六言句例ニ、咲桃花之似頬、笑柳葉之如眉とあり

僕問曰誰郷誰家兒等若疑神仙者乎。娘等皆咲答曰兒等者漁夫之舎兒草菴之微者無郷無家何足稱云。

東征賦ニ訖于今而称云とあり

唯性便水復心樂山或臨洛浦而徒羨王魚乍臥巫峡以空

欵ヲ歎ニ誤

望因霞。

曹植洛神賦ニ洛浦の神女のことみへ、宋玉高唐賦ニ巫山の神女のことをいへるとかゝはりく、此魚とる女子を神女のみくにいひなせる、王魚ハ巨魚の誤り

今以邂逅相遇貴客不勝感應輙陳欵曲而今而後豈可非偕老哉。

邂逅ハ毛詩の字ゆくりなくあふこと、欵曲ハ心のまことをのべつくすこと、而今而後ハ論語の字也

下官對曰唯唯敬奉芳命于時日落山西驪馬将去遂申懐抱因贈詠歌曰

文選應休連書ニ徒恨宴樂始酣白日傾夕驪駒就駕、意不宣展とあり、懐抱ハ心に思ふことをいへり、さて此序とこの歌ハ似去頃とも知りがたし、次下ニ旅人卿も吉田連宜も皆此序と歌とをしらるゝいはゆるを見ざるよしをいへり

阿佐里須流阿末能古等母等比得波伊倍騰美流爾之良延奴有麻必等能古等

あさりするあまのこどもとひとはいへどみるにしらえぬうまびとのこと

しらえぬはしられぬ也よき人なることしるといふ意なりうまびと
は顕宗紀貴人とうまびとゝ訓欽明紀良家子をうまびとのこと訓
り。あまのこなりと卑下しのたまへど見る目のうへよりしらるゝとし
ていふ。あさりは求食と集中にかけり。魚をあさりかくりてつい
でむものなれば、あさりするとは海士のことにいへり

答詩曰　また詩と待るは誤れり

多麻之末能許能可波加美爾伊返波阿禮騰吉美乎夜佐之美阿良波佐受阿利吉

たましまのこのかはかみにいへはあれどきみをやさしみあらはさずありき

やさしみはあるよしくせへまとふよ世のことしくやさしとはいふなほの

あらはさずはしるしくせずきこえず

蓬客等更贈歌三首　また客を容に誤れり

麻都良河波可波能世比可利阿由都流等多多勢流伊毛河毛能須蘇奴例奴

まつらがはかはのせひかりあゆつるとたゝせるいもがものすそぬれぬ

ひかりは川瀬もてる斗みゆるをいふなり。せるはたてるといふ也

うやよまこころて

麻都良奈流多麻之麻河波爾阿由都流等多多世流古良何伊弊遅斯良受毛

まつらなるたましまがはにあゆつるとたゝせるこらがいへぢしらずも

等富都比等末都良能加波爾和可由都流伊毛我多毛等乎和禮許曽末加米

とほつひとまつらのかはにわかゆつるいもがたもとをわれこそまかめ

をとつ人松浦佐用ひめハ美しきあゆみ、独ここに姫とお夜をえしとく

娘等更報歌三首

和可由都流麻都良能可波能可波奈美能奈美邇之母波婆和禮故飛米夜母

わかゆつるまつらのかはのかはなみのなみにしもはゞわれこひめやも

なミこしかはさハ並に思ふなミしハ此様、なミ集みこよりの大河のなミのふかきよりもふかきわが恋めやもといへるハ是をとれり

波流佐禮婆和伎覇能佐刀能加波度爾波阿由故佐婆斯留吉美麻知我弖爾

はるされバわぎへのさとのかはとにはあゆこさばしるきみまちがてに

よきかへハ子なかへあゆて八年魚子又さハ麦語、まちかてハ此時の思ひとへせまりく仙女の約とあるとけり

流上都ヲ脱

麻都良我波奈奈勢能與騰波與騰武等毛和禮波與騰麻受吉美遠志麻多武

まつらがはななせのよどハよどむともわれハよどまずきみをしまたむ

七瀬ハ瀬の数多きをいふ、思ひあまりてハよどむとも我ハ君をのみ待たむといふ

此歌

後人追和之詩三首　都帥老

詩ハ謌の誤りなるべし、都帥老の字ハ後人の書加へしなるべし大伴卿を都帥老と書べきよしなし、されどこゝハ都府楼をいへバ都帥ともいへる也　目録にハ帥大伴卿追和歌とあり

麻都良河波河波能世波夜美久禮奈為能母能須蘇奴例弖阿由可都流良武

まつらがはかはのせはやみくれなゐのものすそぬれてあゆかつるらん

一本流の上都の字なきをよしとせし事ありてそれを取なり

比等未奈能美良武麻都良能多麻志末乎美受弖夜和禮

波故飛都々遠良武

ひとみなのみらんまつらのたましまをみずてやわれはこひつゝをらむ

みらんハみるらんよ

麻都良河波多麻斯麻能有良爾和可由都流伊毛良遠美

良牟比等能等母斯佐

まつらがはたましまのうらにわかゆつるいもらをみらんひとのともしさ

ともしハうらやましき也、巻一あさもよし木人ともしも、まつち山ゆき

くとみらん紀人ともしも、又巻一に既にいへり

○同所に吉田連宜と志るして、下まておくりの歌を書付たるハ此下まて四首の

歌ハ此書牘を添へて宜に贈れるなれバ此書牘の前に四首の歌のあるをいぶかしむべし

封ヲ對ニ誤

祛ヲ私ニ誤

宜啓伏奉四月六日賜書跪開封函拜讀芳藻

こゝ前の書記を天平二年とも見えしハ此書牘をもちの書にてやありけむ

宜ハ続紀に天平五年十二月從五位上吉田連宜為圖書頭とみえ又懐風藻に宜が詩

二首を載せて年七十とあり

心神開朗似懐泰初之月鄙懐除祛若披樂廣之天

世説に夏

侯玄が事を朗々如日月之入懐といひてあり、泰初ハ玄が字也、晋書に衛瓘見樂

廣而奇之嘆曰若披雲霧而覩青天也と見え、祛を本私とありて一本によりて改つ

袪ハ拂に作れり

至若羇旅邊城懐古舊而傷志年矢不停憶平生而落涙但

達人安排君子無悶

邊城ハ大宰府をさして也、古本城を域に作る、年

矢ハ年のうつりゆくのはやきを以て也、安排ハ莊子に安排而去化とみえて注に

排ハ推移也とみえ、おしうつりゆくにしたがひて安んじ居るの意、無悶ハ心のくるしみなき也

伏冀朝宣懐翟之化暮存放亀之術架張趙於百代追松喬於千齡耳 翟ハ山雉也後漢の魯恭といへる人民を治て徳化のゆきとゞきしを表(?)安しいへる人躾かく肥親といふ人をして見せしむるに魯恭の治むる所の野路に雉のあそぶを童子のとらざるゆゑ一を雉をとらへてこれを見せざるをしりて此ハ取得ざるといひし雉の雛を持ち付るればとらずして教へしむとて徳化のあまねきを知れりとぞ 魯の乳哺といへる人道をゆしふ人の亀を籠に入てかふるを見て買てこれを放ちやりしかば亀あまた度かへりみて行けるがのち度々に封せられて身を終しまし即ち其の亀の以きつきたるものいでたりしと段読れども知られざるこのハ孔愉の故なる亀の報ひて侯に封せられしことを為る 張趙ハ杜甫集に頭傳籍に新京兆青史無勞數趙張とあり註に漢の趙廣漢張敞といふ人しゆ宣帝の時京兆尹となりて民を治て善政ありしを記せるものを性良にたとへしへるなり 松喬ハ赤松子王子喬を云

兼奉垂示梅花芳席群英摛藻松浦玉潭仙媛贈答類杏壇各言之作疑衡皐税駕之篇耽讀吟諷感謝歡怡 杏壇ハ孔子杏壇の上にありて諸弟子に書を讀み琴をひきてうたひたまふとまた各言爾志と論語にあることより出しとていへり杏壇ハ杏樹のある壇也 衡皐ハ文選の注に衡皐香草之澤也とありまた衡杜衡也ともいへり

宜戀主之誠誠逾犬馬仰徳之心心同葵藿而碧海分地白雲隔天徒積傾延何慰勞緒 葵藿ハ日にむかふてひらく花ゆゑ君のめぐみを思ふ人になぞらへていふ文選曹子建が表に臣竊自比葵藿とあり 傾延ハ傾首延領の字を切りつゞめたるか詳ならず

孟秋膺節伏願萬祐日新今因相撲部領使謹付片紙宜謹啓不次 相撲のことハ垂仁紀に見ゆ部領を紀に古登利と訓み是ハ宜しく

性良への返事

奉和諸人梅花歌一首　目録に吉田連宜とあり

於久禮為天那我古飛世殊波彌曽能不乃于梅能波奈爾
毋奈良麻之毋能乎

おくれゐてながこひせずハみそのふのうめのはなにもならましものを

ながこひハ巻十二　玉緒乃島絶山の夕暮に長恋しつゝ寝もとまて、
ながく恋ることを宜もいつして八緒が恋と見えてハ弐六にあるべしや、巻十一
中々に君に恋ずハ枚(ヒラ)の浦のあまならましを玉藻かりつゝ　同じく、
ほれ居て長く恋んよりハ家の梅の花にもならましものをといへる

和松浦仙媛歌一首　宜のうた

伎彌乎麻都麻都良乃于良能越等賣良波等己與能久爾
能阿麻越等賣可忘

きみをまつまつらのうらのをとめらハとこよのくにのあまをとめかも

雄略紀蓬莱山をとこよのくにとよめり、こゝもまつらを蓬莱にたとへてよめる女
ハ蓬莱の仙女にたとへて海人をとめかもとよめる也

思君未盡重題二首　宜のうた

波漏婆漏爾於忘方由流可毋志良久毛能智弊仁邊多天
留都久紫能君仁波

はろはろにおもほゆるかもしらくものちへにへだてるつくしのくには

はろはろハ遙々也、由ハ流にかよひておもほゆるをおもはゆるといへり

枳美可由伎氣那我久奈理奴奈良遅那留志滿乃己太知
毋可牟佐飛仁家理

きみがゆきけながくなりぬならぢなるしまのこだちもかんさびにけり

巻二君がゆき気長くなりぬ山たづね、是ハ巻九難波に経宿して明
日還来時と端書せる歌にも島山といひめぐれる河ぞひの岡べの道

ゆゑにまよふおへるかなれば風来せずとよみて後は大和の地名也と云
ふ道るべし憶良の歌にまかりなるよしかつるべしはさびは古びたる之

天平二年七月十日

○目録に山上臣憶良松浦歌三首とありて既のみしが落たるこの

憶良誠惶頓首謹啓憶良聞方岳諸侯都督刺史並依典法巡行部下察其風俗意内多端口外難出謹以三首之鄙歌欲寫五藏之欝結其歌曰

文選干令升晋紀總論曰方岳無鈎石之鎮門無結草之固、潘安仁為賈謐作贈陸機詩、藩岳作鎮輔我京室とあり

麻都良我多佐欲比賣能故何比列布利斯夜麻能名乃美夜伎々都々遠良武

まつらがたさよひめのこがひれふりしやまのなのみやききつゝをらむ

此中ふるはとよみけるは非也

多良志比賣可尾能美許等能奈都良須等美多々志世利斯伊志遠多禮美吉

たらしひめかみのみことのなつらすとみたゝしせりしいしをたれみき

一云阿由都流等（アユツルト）

よる御紀をかりていへり、なは魚の古語也、紀に魚此云儺、つるとは釣
ふく、みたゝしせりしは御立しなりし也、川辺の石にたゝせしその石を
後まつりひ給へる石なるべし

毛毛可斯母由加奴麻都良遅家布由伎弖阿須波吉奈武遠奈爾可佐夜禮留

もゝかしもゆかぬまつらぢけふゆきてあすはきなむをなにかさやれる

ゆかぬハ百日もゆかぬ、たゞ久しきを云、さやれるハさはれる也、神武紀に
のたまふ事く、ちぎハ佐夜羅孺（サヤラズ）ハさはらず、佐夜離（サヤリ）ハさはり、此条の下に

こらをさへなるとよめるも、大ニたがへり。名にたちて云ひ行しを石となりしとよめるよ

天平二年七月十一日筑前國司山上憶良謹上

○目録ニ詠領巾麾嶺歌一首とあるハ次の落しなるべし

大伴佐提比古郎子特被朝命奉使藩國艤棹言歸稍赴蒼波。

宣化紀ニ二年冬十月以新羅寇於任那詔大伴金村大連遣其子磐與狭手彦以助任那是時磐留筑紫執其国政以備三韓狭手彦往鎮任那加救百済、またく欽明紀ニ二十三年八月遣大将軍大伴連狭手彦領兵数万伐于高麗と見え、艤ハ字書ニ整舟也といへり

妾也松浦佐用嬪面嗟此別易歎彼會難即登高山之嶺遥望離去之船悵然斷肝黯然銷魂遂脱領巾麾之傍者莫不流涕因號此山曰領巾麾之嶺也乃作歌曰。

黯然銷魂ハ文選江淹が別賦の語也、領巾ハ天武紀肩巾此云比例とも見え、古の婦人の飾なり

黯ヲ今黙ニ誤

いまだにそれによりて佐良のよめるなるべし

得保都必等麻通良佐用比米都麻胡非爾比例布利之用利於返流夜麻能奈

とほつひとまつらさよひめつまごひにひれふりしよりおへるやまのな

きつ人枝狭、欽明紀調吉士伊企儺新羅にて殺されし時ニ妻大葉子も

とらはれしけのまかりくふのきのへにたちておよそこハ比例ふりしよし

やまとへむきて哉人わてよめるもほどさまなれバのせて、そのさよひめ

にさる

後人追和

夜麻能奈等伊賓都夏等可母佐用比賣何許能野麻能閉仁必例遠布利家無

やまのなといひつげとかもさよひめがこのやまのへにひれをふりけむ

さよひめがおのが名を山の名とかゝる事侍げと思ひて、この領巾をふりけん

とは山のへは山の上之

最後人追和

余呂豆余爾可多利都夏等之詩能多氣仁比例布利家良
之麻通羅佐用嬪面

よろづよにかたりつげとしこのたけにひれふりけらしまつらさよひめ

つげとしのしは助辞、たけは嶽なり、ふるしはかつり出る様なれバたと清べし

最最後人追和二首 そは後の字の下人の字落せり、同類によりて補へつ

宇奈波良能意吉由久布禰遠可弊禮等加比禮布良斯家
武麻都良佐欲比賣

うなばらのおきゆくふねをかへれとかひれふらしけんまつらさよひめ

ふらしはふりしを延いふ

由久布禰遠布利等騰尾加禰伊加婆加利故保斯苦阿利
家武麻都良佐欲比賣

ゆくふねをふりとゞみかねいかばかりこほしくありけんまつらさよひめ

領巾振とゞむるべきを思ひて、ふりとゞめかねといへり、こほしくは恋しく也

書殿餞酒日倭歌四首 天平十二年十二月帥大伴卿大納言に任ぜられて京へのぼる時、筑紫の館にてうまのはなむけせらるゝ時よめる也、和哥とは、此集にちなし、和歌とは唱和して人に送別の詩あるにたいして倭哥とことわれるなるべし、おほくは書になりて日本挽哥とあるもあり。書殿は書院といふがごとし

阿麻等夫夜等利爾母賀母夜美夜故摩提意久利摩遠志
豆等比可弊流母能

あまとぶやとりにもがもやみやこまでおくりまをしてとびかへるもの

夜上都ハ衍ナレバ除ケリ

おくるときまでハ送りまつらくハおもへるはあれど、おもをおくるまつ
つまらく又はいはらんかなといへる

比等母禰能宇良夫禮遠留爾多都多夜麻美麻知可豆加

婆和周良志奈牟迦

ひとみなのうらぶれをるにたつたやまみまちかづかばわすらしなんか

人皆をひとかねといへる例なし、宮ちかき母祢ハ祢那を下上に誤り又那を母

に誤れるなるべしといへり、みなのことハ大宰府に残れる人々ハ別情に

さびしをるに、龍田山へ行るをいふなればただ宰府の人をとどへるるれどさらば

まんなしいふべ、都多の下都のみなくたるまじきことなりしを次

伊比都々母能知許曾斯良米等乃斯久母佐夫志計米夜

母吉美伊麻佐受斯豆

いひつゝものちこそしらめとのしくもさぶしけめやもきみいまさずして

おは臨て後のおもひとはで、おて後こそよくしるめことどのしくハさり

くゝとりとはさらでけめやもハ過る例なく、よしくさびしきもあるといへる又接にさく

をとのしくといへる例なし、等乃の乃ハ母の誤なるべし、又宮ちかき人説に斯良米

の斯ハ阿の誤、等乃ハ志乃の誤なるべくのちこそあらめ志乃しくもとと例べし一そ

のことハ悉くあるといふにつけ後はいささかるべければ志げしくのほどなるといふ

さらでさびしくんくんげんといふべきとけあくいへるハ祢古紀おもふるしに那礼家

理鶏迷夜となりしあれたちかぐんやんといへり、志の字を改されべいはるがぬ　のく

余呂豆余爾伊麻志多麻比提阿米能志多麻乎志多麻波

禰美加度佐良受豆

よろづよにいましたまひてあめのしたまをしたまはねみかどさらずて

まて二鳥ハ皇子薨ありし時の長歌に、あら天皇の天の下まをしたまへば

百代にしてもあらんとしいひし、政教おこなひてまもとまでといへるといへるハ

大納言をおもふきをのまうちつのきと云ばさるべきいつまでもとて見ゆ、たまきもねを
たまへとよ云ふ、みなぐ八胡延へもあらぎとする の語也

聊布私懐歌三首

是も作者なく、先の歌ハ前の時とのべられハせ二の歌
そのかみ 遠国の任に居るを大伴の人悲へりし也

阿麻社迦留比奈爾伊都等世周麻比都都美夜故能提夫
利和周良延爾家利

あまざかるひなにいつとせすまひつつみやこのてぶりわすらえにけり

あまざかるひハ、もみと云を云へてみやこハ風俗を云ふ、わすらえハわすれとえと延ひて
わすられるとハ言を同じ、わすらへハ延言ハ閑のうきえこえ云ふのうると用る
ハ伊の延言ともしるべし

加久能未夜伊吉豆伎遠良牟阿良多麻能吉倍由久等志
乃可伎利斯良受提

かくのみやいきづきをらんあらたまのきへゆくとしのかぎりしらずて

いきづきハ息衝とかく、長息とも同し、きへゆくハ来経行之、あらたまの
年ハ年と頭てとある八、ぬでまのかひの要語といへる義之、古事記
美夜受比売の歌にあらたまのとしがきふれバあらたまのつきハきへゆく
とりも同じ

阿我農斯能美多麻多麻比弖波流佐良婆奈良能美夜故爾
爾咩佐宜多麻波禰

あがぬしのみたまたまひてはるさらばならのみやこにめさげたまはね

あがぬしハ吾主之、紀に君主大人同じく宇志と訓り、或人ぬしハ何のうしと云
べきを、乃字の略なれハ、ぬしといへるハかまでといふべきならて
れバわがしひく乃うしといふべのうるぞ、ぬと宇と音ひくぬしと略ちうし
と同じ語也、されバ古くハうしと云ひ、みたまハ御魂之、紀に神祇之霊

天皇之頼〻まどいへるかめし、えさげらまねハ石上郎へ、志ゆを汚れバ作とし

なつれおく

天平二年十二月六日筑前国司山上憶良謹上

三島王後追和松浦佐用嬪面歌一首　続紀宝亀二年七月従

四位下三島王之女河邊王葛王配伊豆国至是皆復属籍とある人也

於登爾吉伎目爾波伊麻太見受佐容比賣我必禮布理伎

等數吉民萬通良楊滿

おとにきゝめにはいまだみずさよひめがひれふりきとふきみまつらやま

松浦山名版中なる山へ、君待といひふらし、此君ハ夫をいふ、ふりき

らふハふるけるといふこゝろ

大伴君熊凝歌二首　大典麻田陽春作

目録によるに大典麻田連陽春為

大伴君熊凝述志歌とすべし、然激が傳次に委し

國遠伎路乃長手遠意保保斯久許布夜須疑南已等騰比

母奈久

くにとほきみちのながてをおほゝしくこふやすぎなんことゝひもなく

おほしくハおぼつかなく、こふやすぎなんハ道の長手をいふなり

恋やりすごさなんと云へ、ことゝひもなくハ此のちゝはゝにものいふこと

いつまでもなきといふ

朝露乃既夜須伎我身比等國爾須疑加弖奴可母意夜能

目遠保利

あさつゆのけやすきわがみひとくにゝすぎかてぬかもおやのめとほり

ひとくにハ他国と云、すぎかてぬかもハ過がたく思そ云へ、親のめとほりハつねにハ

くれおもふとき

筑前國司守山上憶良敬和為熊凝述其志歌六首并序

肥ノ下後ヲ前ニ誤ル一本ニ依テ改ム 官ヲ宮ニ誤

合ヲ今ニ誤

一本数和以下の九字序の字の下にあるへし国司ハ掾目まてをひろくいへり得られハ国
司守とあるへし
大伴君熊凝者肥後國益城郡人也年十八歳以天平三年
六月十七日為相撲使某國司官位姓名従人参向京都為
天不幸在路獲疾即於安藝國佐伯郡高庭驛家身故也
身故を物故の誤りと契沖いへり、されと死をさしてたゝ故ともいへはもとのまゝにてあるへし
臨終之時長歎息曰傳聞假合之身易滅泡沫之命難駐所
以千聖已去百賢不留況乎凡愚微者何能逃避 假合ハ佛典
に四大假合とかいへるにて地水火風をよせ合せたる身といふ也、泡沫ハ
金剛般若経に、一切有為法如夢幻泡影とあり、千聖百賢ハ史記に五帝
之聖而死、三王之仁而死、五伯之賢而死なといへるをいふ也
但我老親並在菴室待我過日自有傷心之恨望我違時必

親ヲ説ニ誤

乃ノ下ノ文ヲ脱

致喪明之泣 戦国策に王孫賈之母曰、汝朝出晩来、吾則倚門而望、汝暮、
檀弓に子夏喪其子而喪其明とあり
哀哉我父痛哉我母不患一身向死之途唯悲二親在生之
苦今日長別何世得覲乃作歌六首而死其歌曰 覲ハ父母の起
居を問といふ也 これハ熊凝に代りて憶良の作れる也
宇知比佐受宮弊能保留等多羅知斯夜波波何手波奈例
うちひさすみやへのほるとたらちしやはゝのてはなれ
常斯良奴國乃意久迦袁百重山越弖須疑由伎伊都斯可
つねしらぬくにのおくかをもゝへやまこえてすきゆきいつしかの
母京師乎美武等意母比都都迦多良比袁禮騰意乃何身
もみやこをみむとおもひつゝかたらひをれとおのかみ
志伊多波斯計禮婆玉桙乃道乃久麻尾爾久佐太袁利志

計ハ許ノ誤

しづはなれバたまぼこのみちのくまみなくさだめたまふ之
婆刀利志伎提等計自物宇知許伊布志提意母比都々奈
ばとりしきてとこじものうちこいふしておもひつゝな
宜伎布勢良久國爾阿良波父刀利美麻之家爾阿良婆母
げきふせらくくにゝあらばちゝとりみましいへにあらばはゝ
刀利美麻志世間波迦久乃尾奈良志伊奴時母能道爾布
とりみましよのなかハかくのみならしいぬじもののみちにふ
斯豆夜伊能知周疑南　一云和何余須疑奈牟
してやいのちすぎなん

うちひさすも枕詞、受ハ救の誤也、宮書のこゝろを思ひよせたる也、宮ちハ須
の誤なるべしといへり、たらちや、冠辞考に云、衍ハ祢の誤か、夜一本能
に作れり、さらぬにてもたらちねの訓べきよし也、今按るに巻十六に垂乳

為まかり、たらちハ日足(ヒタラシ)なり、育て日をたらしむる義にして、ますやハ妙好
まほろばくおもへる、国のおくのハ奥処(オクカ)なれとハ、ありて拾ふ人と
語らひて行く、おのが身しのしハ助辞、いふべしされど、ハ常うち病といへ、
むぼての枕詞、道のくまみ、一本乃の下久の字ありてよろしきくまのみハ曲方(クマベ)
のごとくおもはれる事を以て、集中をとくまびとよめり、尾の字びとよむ
されど多くみのこのかの字用ひたるハ浦方(ウラベ)を浦傍(ウラビ)とし浦箕とよいへるが如し、
くさだめたまふらく、たハ発語、等を於ハ若を衍として之、等計ハ等許の誤
なるといへども、床のうへといふ也、先人説、等ハ箇の誤なるべし、かこ
ともといふべきが、みづからをといへりうちこいふしてハうち臥ハ詞こいふ
しハ臥所也、ふせらくハふせると延言、国にあらばち、家国にありし
ばなどこそみまし、ハ、ここにあげたる也、二妻とあるバ皆らて家室(イヘ)なりしいへ
に同じ、かくのみなるしハかくのぬき縛なるらしといふ也、犬じものハ犬のぬさ

一云のわがよは喜齢之いきしたのおよみて五そは夜あき
多良知遲能波々何目美受提意保々斯久伊豆知武伎提
可阿我和可留良武
たらちしのはゝがめみずておぼゝしくいづちむきてかわがわかるらん
楊子遲は進の誤なるべし官本多良遲子とあるハみなあやまりていづるとも
てゝいぬるなるんといふ之
都禰斯良農道乃長手袁久禮久禮等伊可爾可由迦牟可
利豆波奈斯爾　一云可例比波奈之爾
つねしらぬみちのなかてをくれくれといかにかゆかむかれひはなしに
くれくハ宣長云顕明紀云工手之盧母俱例尼とあるくれくれハ闇きこゝ
まておぼつかなきさまをいふ今の俗もうろくるさるをあとくいふかれてハ旅
は餉かれひを借ても餉とかきたる直といふ新撰万葉集の〜

笥代とあるも日本紀通證の説に粮糧和名抄加天とあるかて八かれての約なるべし一
かれてハ餉直也礼記の餉利とあるも直とてといふハあかれひの略なるべし
云かれひハ餉也乾飯の略なるべし
家爾阿利豆波波何刀利美婆麻奈具佐牟流許許呂波阿良
麻志斯奈婆斯農等母　一云能知波志奴等母
いへにありてはゝがとりみばなぐさむるこゝろはあらましゝなばしぬとも
とりみるはとりまかなひみるといふ也
出豆由伎斯日乎可俗閇都都家布家布等阿袁麻多周良
武知知波波良波母　一云波波我加奈斯佐
いでゝゆきしひをかぞへつゝけふけふとあをまつらんちゝはゝらはも
あをまたすらんハまつを延へるらん之
一世爾波二遍美延農知知波波袁意伎豆夜奈何久阿我

離ハ雜ノ誤

和加禮南　一云相別南

ひとよにハふたゝびみえぬちゝはゝをおきてやながくあがわかれなん

按るに天平勝宝年中に奈良の薬師寺にたてられたる佛足石の碑の歌、

みあとつくるいしのひゞきハあめにいたりつちさへゆすれちゝはゝがためにもろひと

りのためよ、よき人のまさめにみけんみあとすらをわれハえみずていはに

ゑりつくたまにゑりつくなどありて結句を二様によめるもあり、反歌も

ゆゑ同じこゝろなる辞もおなしきやまれバ古歌の例に和我余須疑奈牟

ことハ次の奈良和遅能らしの経等にほゆるごの類くさ歌の例に

入しなるべし

貧窮問答歌一首并短歌

風離　雨布流欲乃　雨雜　雪布流欲波　為部母奈久

かぜまじりあめふるよのあめまじりゆきふるよハすべもなく

乞乞ハ乞乞ノ誤之

之何ハ之波ノ誤

寒之安禮婆堅塩乎取都豆之呂比糟湯酒宇知須須呂比

さむくしあれバかたしほをとりつゞしろひかすゆさけうちすゝろひ

豆之可夫可比鼻毗之毗之爾志可登阿良農比宜可伎撫

てしはぶかひはなびしびしにしかとあらぬひげかきなで

而安禮乎於伎弖人者安良自等富己呂倍騰寒之安禮婆

てあれをおきてひとハあらじとほころへどさむくしあれバ

麻被引可賀布利布可多衣安里能許等其等伎曽倍騰毛

あさぶすまひきかゞふりぬのかたぎぬありのことごときそへども

寒夜須良乎和禮欲利母貧人乃父母波飢寒良牟妻子等

さむきよすらをわれよりもまづしきひとのちゝはゝハうゑさむからんめこども

波乞乞泣良牟此時者伊可爾之都都可汝代者和多流

はこひてなくらんこのときハいかにしつゝかながよハわたる

風の下の歌ハ雑の決へ、堅塩とかく和名抄石塩一名白塩又有黒塩今按
俗呼黒塩為堅塩、日本紀私記云堅塩木多師是也、かたしほといふ嗚と
くひかきゝして酒のかす、源氏物語なとにきこえて、かしこまりていふ、一
口つきするもくるしきことをいふ糟湯酒ハ酒の糟を湯にかきてすゝる也、
うちハ詞、よしろひハよしろひを延ゐ之、之可一本之波ニ作るをよしとて、
志はふかひハ志はぶきを延ゐ之、鼻びしびしハ嚏之、そゝろひしとも
手ねいふと思ふくいつて、志うしもあらぬハさしもあらぬといふか、又古本志の字
なし、これハ非才をかくしきていへば、かしこまりぬといふにや、あれをおもきてハ
吾を除くてほこらへどハほこれどもいふを延ゐ之、川かとつりハ彼ゐ之布
かゝきぬ和名抄云竹取翁の物語に結経方衣といひて軽くて肩計
にきるもののかゝるへし、あるもののごとくハ有かぎり遠くきるへしといふ
寒き夜へしたに、飢寒ゝけんハ糟湯酒を飲に對へて寒人をといひ

ていつり、こひて泣らんハ妻子が飢とえもなくえ、乞こハ乞食の得べしてま
で同の意之、是より末ハ答ふるかるなつかしくしもみえ自ら
四年くばはの句よりまたつらく答ゐるく、二ツハあしらと答ぶ答
されば反哥も一首なり
天地者比呂之等伊倍杼安我多米波狭也奈理奴流日月
あめつちハひろしといへどあがためハせばくやなりぬるひつき
波安可之等伊倍騰安我多米波照哉多麻波奴人皆可吾
はあかしといへどあがためはてりやたまはぬひとみなかわれ
耳也之可流和久良婆比等波安流乎比等奈美爾安
のみやしかるわくらばにひとはあるをひとなみにあ
禮母作乎綿毛奈伎布可多衣乃美留乃其等和和氣佐我
れもなれるをわたもなきぬのかたぎぬのみるのごとわゝけさが

良ハ長ノ誤

禮流可可布能尾肩爾打懸布勢伊保能麻宜伊保乃内爾

れるかゞふのみかたにうちかけふせいほのまげいほのうちに

直土爾藁解敷而父母波枕乃可多爾妻子等母波足乃方

ひたつちにわらときしきてちゝはゝはまくらのかたにめこどもはあしのへ

爾圍居而憂吟可麻度柔播火氣布伎多豆受許之伎爾波

にかくみゐてうれへさまよひかまどにはけぶりふきたてずこしきには

久毛能須可伎豆飯炊事毛和須禮提奴延鳥乃能杼與比

くものすかきていひかしくこともわすれてぬえどりののどよひ

居爾伊等乃伎提短物乎端伎流等云之如楚取五十戸

をるにいとのきてみじかきものをはしきるといへるがごとくしもとるさと

良我許恵波寝屋度麻低来立呼比奴可久婆可里須部奈

をさがこゑはねやどまできたちよばひぬかくばかりすべな

伎物能可世間乃道

きものかよのなかのみち

たまはひとゝなりて、天地は下界のごとく、あがたはあまた、おはしませど、人皆からの

のは清べし、餘同く、わくらばとは、たまたまといふ事也、人となる

とは、かくさきと和久良婆尓あれるあるは、ちらくよきあるも、人なみなる

あれでもなれるとはなれるといふ也、宮ちら作はつくるなり、例へしを世をしつくる

ともあらしいへば田畠を作るなれば、つくりものとしてあらしへしとても、海松のごとわゝ

さのわゝけさがれるといふは、うつぼ麁服よかうらびろのわけさがれるを見てといひ、条中杖萩の

これわらばとは、かゝふのみかゝふは宮ちら字鏡に襤 先引反 殘帛也 也不礼

がし不とも云いふ、程袖中抄詞にもつゞりさせてふきるもくしものとしは世清みきり

ぎる、ばつゞりさせ、かゞはひろきんとるもとい、かゞとはきぬ布のやれて何もなく

べくもなきともくとまでもえ、肩衣はそのけはよそいへる布肩衣といひて、

ふせいほハ字の如くにて、田廬のたぶせくの家の内に田廬を多夫世と
あるもふせやといへる、まげいほハ曲りよろぼひたるをいふ、ひたつちにハ、直
ちに土の上へわらをしきたるなり、神代紀脚邊此云阿度倍とあれバ、こゝもあと
のべと訓べし、うれへさまよひハ、なげきのさまよひぬれバなりといふにおなじ
くうめき嘆くをいふ、こしき 和名抄甑 和名古之岐 炊飯器也、本草云甑帯 和名古之
岐和良とあるも、ぬえどりの如く、いとのきてハいとゞといふ、此歌によりて伊等能
伎提いひきてきるハこしとなる、こしきあるを、此末の沈痾自哀文に諺曰
痛瘡灌塩短材截端といへるにおなじ、しもとハ笞杖也、五十戸良、此良ハ長の
字の誤也、戸令云凡戸以五十戸為里、毎里置長一人といへるをさとを
さとをさともいへるに例べし、貪くて田租賦役などを責る事きびしく
ねやどハ寝屋戸也、此里長が笞杖を持来て屋の戸に立てよばふる
といふなり

世間乎宇之等夜佐之等於毋倍杼毋飛立可袮都鳥尒之安良袮婆

よのなかをうしとやさしとおもへどもとびたちかねつとりにしあらねば

反云へ、うしとおもひやさしとおもへどといふ也

山上憶良頓首謹上

好去好来歌一首 反歌二首

天平五年三月多治比真人廣成遣唐使にて出立時、憶良のよみておくれる也、寄てみちさきくいましてかへりまゐませとあるなれバ、ことをとゝのへて祝詞めかし

神代欲理云傳久良久 虚見津倭國者 皇神能伊都久志吉國 言霊能佐吉播布國等 加多利繼伊比都賀

かみよよりいひつてけらくそらみつやまとのくにはすめがみのいつくしきくにことだまのさきはふくにとかたりつぎいひつがひ

戴ヲ載ニ誤

比計理会世能人母許等期等目前爾見在　知在人
いろかいまのよのひともことごとめのまへにみるをしろしめすひと
佐播爾満弖播阿禮等母高光日御朝廷　神奈我良愛
さはにみちてはあれどもたかひかるひのみかどかんながらめで
能盛爾　天下　奏多麻比志　家子等　撰多麻比
のさかりにあめのしたまをしたまひしいへのこえらびたまひ
天勅旨（反云大命）戴持弖　唐能　遠境爾　都加播
ておほみことをいただきもちてもろこしのとほきさかひにつかは
佐禮麻加利伊麻勢
されまかりいませ

いひつてハいひつたへの?ゑん、皇神のいつくしき国ハ厳（イツ）くしき国といふなり、
此二句ハ下にいふべきくさぐさの大御神たちのことをいはんとておくなり、

言霊のさきはふの二句ハ即此ます神霊のさきはひたまふまにまにのこと
をいへるハいひつたへいひつぎを延て此のよの人ことごとく皇ちら
此二句ハ上の神のことハその世の人でもよく見て知るをすべてといひて、さ
とみまし幸ハまにまにとよみつれど、さてハその世のことハ叶ひがたらん、さる
ハもちろん知らるゝ句ゆえ、愛盛（まなかり）皇たちのおほかたのさかりのことよみてあるべし
うつのさかりとよみつれど、うつしとうつしいへるなり、孝謙紀の詔愛盛
に一二人等に冠位上賜ひ、まつ文徳実録ノ御意乃愛盛にうつくしみ
ゆえよろこめでのさかりとよむべし、天下まをし給ひしの子とハ、文武天皇の
大宝元年ニ薨ぜられし、左大臣正二位多治比真人嶋公ハ、宣化天皇の後
玄孫のよしまを多治比王の子之、広成ハその子の孫なりと見れば、さきのいはゞいよゝ
ハのぶと着るなれし、戴とし載ニ誤、続紀宝命ニ祖名乎戴持而などあり

宇奈原能邊爾母奥爾母神豆麻利宇志播吉伊麻須諸能

遠志ヲ志遠ニ誤

岬ヲ岫ニ誤、大ヲ丈ニ誤

うなばらのへまで、おきまでも、かんづまりましまして、はべりまして、もろ〱の。

大御神等。船舳爾。（布奈能閇尓）道引麻遠志。天地能。大御

神等。倭。大國靈。久堅能。阿麻能見虛喩。阿麻

おほみかみたちの、ふなのへにみちびきまをし、あめつちのおほみ

かみたちや、やまとのおほくにみたま、ひさかたのあまのみそらゆ、あま

賀氣利。見渡多麻比。事了。還日者。又更。大御神

がけりて、みわたしたまひ、ことをはりてかへらんひは、また、おほみかみの、のみ

等。船舳爾。御手打掛弖。墨繩遠。播倍多留期等久。阿庭

たち、ふなのへにみてうちかけて、すみなはを、はへたるごとくあて

可遠志。智可能。岬欲利。大伴。御津濱。備爾。多太泊爾。美船。播

このみち、ちかのさきより、おほとものみつのはまべに、たゞにてまみふねは

將泊。都都美無久。佐伎久伊麻志弖。速歸坐勢

はてん。つゝみなく、さきくいまして、すみやかにかへりませ

神づまりハ神集りてと義にいふ、きよき宮ちら神づまりハ神鎮之神留とかけど、陸

り座して神をろといふ、集まりてハこゝハきこえがたし、海辺ハ常に神の集りいませバ

きよなかしに此舟をもらんが為に集りませるなるべし、たきといふハきこえで、

されバ是ハ此海邊に又湊の傍くなるを請座して、そこをとしハきいませて一々

まくの神たちをいふといへども、うしはきいませてハ、古事紀建御雷神降

到て大国主神に問ひたまひしく、汝之宇志波祁流葦原中国者我御子之

所知国言依賜ひきと、式崇神祝詞、山川能清地尓遷出奉氏吾地止宇須波

伎坐世云々、此うしはきもうしはきも同じくうしはくといふことの約まることにし

ハ神代紀大脊飯三熊之大人（大人此云于志）とあるも、ぬしといへるにて、その方ハ

うしぬとあるにて、ぬしといふに同じ、此所を領じます神を申せるなり、道引麻

遠志ハ本志遠とあるを、一本によりて改つ、倭の大国ミたま、崇神紀に

日本大国魂神とみえ、垂仁紀に倭大神とみゆ、おほかたハ出雲国造
神賀詞に天能八重雲乎押別氐天翔国翔氐天下乎見廻氐云云
とみえ、なみなハ和名抄縄墨須美奈波とみゆ、すへなるぬくハ引延しなる
ぬくなど、阿庭可遠志の庭を一本遅に作る、先人云阿ハ問ヶ国の誤り、
遠ハ遐の誤にて、とちとへしなるべし、清にあらけてとよりハ指出しと
いはしかといへる也、室ちハおちかをしハ智可の抱領と字ゆ、おちの、智のと
云の本に有る抱領ん、さておちかハ未考へず、今しハよしとは手間ぢといへる也
考べし、岫ハ岬の誤なるべき也、智可ハ肥前松浦郡値嘉鳥なく、
こをみさきをといへり、たゞなてにハ、船の直ちに見んるをといふ也

反歌

大伴御津松原可吉掃弖和禮立待速歸坐勢

おほとものみつのまつばらかきはきてわれたちまたんはやかへりませ

大みしの枕詞、かきハ掃、きハもちつく、良比と物あれハ利とちかと伎に登
ハしてはきとゐる

難波津爾美船泊農等吉許延許婆紐解佐氣弖多知婆志利勢武

なにはつにみふねはてぬときこえこばひもときさけてたちばしりせむ

ときさけハ解放こと、紐解ハまでしちかくにさぎ迎へてんといふ也

天平五年三月一日良宅對面、獻三日、山上憶良

謹上大唐大使卿記室　良宅以下の七字を本に本行にせり、

もし小字にするなるべし、良ハ憶良の略、獻るハ三百ゑと八朔日に此うさ
ぐめとよみくいそれを大使へ見せるハ三日といふなるべし、續紀に
天平四年八月從四位上多治比真人廣成を遣唐大使と為しめられ、
同五年三月廣成ホ々節刀を授るよしみえ、同四月己亥遣唐四船

難波津より發て、日七年三月丙寅唐國より帰よし又ゆ

沈痾自哀文　山上憶良作

竊以朝□佃食山野者。猶無災害而得度世。謂常執弓箭不避六齋所値禽獸不論大小孕及不孕並皆殺食以此為業者也

なりんといふは次の句の晝夜と對せる文なれば必蔭字なり。佃はかり
して獣をとるをいふ。釣は盾とあるは値の誤なるべし。一本に値と
そハことろわなし、或人ハ有の誤なりといへり

晝夜釣漁河海者。尚有慶福而全經俗。謂漁夫潜女各有所勤。男者手把竹竿能釣波浪之上、女者腰帶鑿籠潜採深潭之底者也

況乎我從胎生迄于今日。自有修善之志。曾無作惡之心。謂聞諸惡莫作諸善奉行之教也

所以禮拜三寶。無日不勤。毎日誦經發露懺悔也

敬重百神。鮮夜有闕。謂敬拜天地諸神等也

嗟乎媿哉。我犯何罪。遭此重疾。謂未知過去所造之罪若是現前所犯之過無犯罪過何獲此病乎

初沈痾已來。年月稍多。謂經十餘年也

是時年七十有四。鬢髮斑白。筋力尫羸。不但年老。復加斯病。諺曰。痛瘡灌鹽。短材截端。此之謂也。

尫は尫弱にてよわきをいひ、羸は羸瘦とてやせたるをいふ。諺は此時
かまりひなれたることはざなるべし。此のまよいふきおびふハかふ疵をそそ
くちよのごとしといふ。下は後の段落は罪を自らあらはすをいふ

四支不動。百節皆疼。身體太重。猶負鈞石。二十四銖為一兩、十六兩為一斤、三十斤為一鈞、四鈞為一石、合一百二十斤也

懸布欲立。如折翼之鳥。倚杖且歩。比跛足之驢。

懸布は布を梁などにかけてそれにすがりて起きあがるといふ。折翼はつばさのをれたるをいふ。跛足は足のな
なりん、文字の也不詳なれど、折翼はつばさのをれたるをいふ。跛足は足のなえたるをいふ

吾以身已穿俗。心亦累塵。欲知禍之所伏。祟之所隱。穿俗は
いまだ俗をはなれずして、累塵は俗累とし塵俗ともいひて、わづらはしき俗に混居る

とす。禍之所伏こゝハ、老子ニ禍兮福所倚、福兮禍所伏とみえたるを

龜卜之門巫祝之室無不往問若實若妄隨其所教奉幣帛無不祈禱然而彌有增苦曾無減差吾聞前代多有良醫救療蒼生病患至若揄樹扁鵲華他秦和緩葛稚川陶隱居張仲景等皆是在世良醫無不除愈也扁鵲姓秦、字越人、勃海郡人也、割胸採心而置之、投以神藥即寤如平也、華他字元化、沛国譙人也、若有病結積沉重者、在内者刳腸取病、縫復摩膏、四五日差之、

揄樹ハ俞跗の誤なるべし、史記扁鵲傳ニ、上古之時醫有俞跗といひ、又ハ黄帝時將也といへり和緩ハ醫和醫緩とて二人ともに秦国の名醫なりと傳ニ見えたり、葛稚川ハ葛洪なり、陶隱居ハ陶弘景なり、皆晋の代の名醫、張仲景名ハ機後漢の人なり、記文ニ如平也とあるも也ハ生の誤なるべし、元化と無他ハ誤れり

追望件醫非敢所及若逢聖醫神藥者御頭割剖五藏抄採

百病壽達膏肓之隩處肓鬲也、心下為膏、攻之不可、達之不及、藥不至焉、不欲顯二豎之逃匿謂晋景公疾、秦醫緩視而遯者可謂為鬼所殺也、

抄採拾穗本ニハ抄採ニ作るなり

傳ニ晋侯疾病求醫于秦、秦伯使醫緩為之、未至公夢為二豎子曰、彼良醫也、懼傷我焉逃之、其一曰居肓之上膏之下若我何、醫至曰、疾不可為也、在肓之上膏之下、攻之不可、達不及、藥不至焉、不可為也、公曰、良醫也、厚為之礼而歸之とみえ

命根既盡終其天年尚為哀聖人賢者一切含靈誰免此道乎、何況生錄未半為鬼枉殺顏色壯年為病橫困者乎在世大患孰甚于此志恠記云、廣平前太守北海徐玄方之女、年十八歳而死、其靈謂馮馬子曰、案我生錄、當壽八十餘歳、今為妖魅所枉殺、已經四年、此遇馮馬子、乃得更活是也、内教云、瞻浮洲人、壽百二十歳、謹案此數、非必不得過此、故壽延經云、有比丘名曰難達、臨命終時、詣佛請壽、則延十八年、但善為者、天地相畢、其壽夭者、業報所招、隨其脩短而為半也、未盈斯竿、而遄死去、故曰未半也、

志恠記よりて未半也までを、本大字ニあるハ誤なり、遇馮馬子一

徵ヲ徵ニ誤ル

本遇と遇に作る、善為ハ為善の誤なるべし、笇ハ算の古字之

任徵君曰、病從口入、故君子節其飲食、由斯言之、人遇疾病、不必妖鬼、夫醫方諸家之廣說、飲食禁忌之厚訓、知易行難之鈍情、三者盈目滿耳、由來久矣。任徵君ハ梁の任昉字ハ元昇といふ　人之厚一本原に作る

抱朴子曰、人但不知其當死之日、故不憂耳、若誠知羽翮可得延期者、必將為之、以此而觀、乃知我病蓋斯飲食所招、而不能自治者乎。羽翮ハ道を得て飛行するものを又仙術とはし人を羽客といふ

帛公畧說曰、伏思自屬、以斯長生、生可貪也、死可畏也、天地之大德曰生、故死人不及生鼠、雖為王侯、一日絕氣、積金如山、誰為富哉、威勢如海、誰為貴哉、遊仙窟曰、九泉下人、一錢

不直、孔子曰、受之於天、不可變易者形也、受之於命、不可請益者壽也。見鬼谷先生相人書 故知生之極貴、命之至重、欲言言窮、何以言之、欲慮慮絕、何由慮之、惟人無賢愚、世無古今、咸悲嗟歎、歲月競流、晝夜不息。曾子曰、往而不反者年也、宣尼臨川之嘆亦是矣也 老疾相催、朝夕侵動、一代歡樂、未盡席前。魏文惜時賢詩曰、未盡西苑夜、劇作北望塵也 千年愁苦、更繼坐後。古詩云、人生不滿百、何懷千年憂矣、北望ハ北邙に同し、文選に本千ハ常懷千歲憂とあり、若夫群生品類、莫不皆以有盡之身、並求無窮之命、所以道人方士、自負丹經、入於名山、而合藥之者、養性怡神、以求長生。合藥ハ一本合樂に作るハ誤なり

抱朴子曰、神農云、百病不愈、安得長生、帛公又曰、生好物也、死惡物也、若不幸而不得長生者、猶以生涯無病患者為福大哉。帛公ハ本帛出に作るハ誤なり、生好物也死惡物也ハ左伝の語なり

今盗上ノ
偷邪上ノ
不ヲ脱

今吾為病見惱不得臥坐向東向西莫知所為無福至甚總集于我人願天從如有實者仰願頓除此病賴得如平以鼠為喩豈不愧乎已見上也

總集于我の上脱語あるべし、以鼠為喩ハ毛詩相鼠有皮人而無儀人而無儀不死何為、已見上也の四字一本にあり

悲歎俗道假合即離易去難留詩一首并序

竊以釋慈之示教謂釋氏慈氏先開三歸謂歸依佛法僧五戒謂一不殺生、二不偷盗、三不邪淫、四不妄語、五不飲酒也而化法界周孔之垂訓前張三綱謂君臣父子夫婦五教謂父義、母慈、兄友、弟順、子孝、以齊濟郡國

慈氏ハ弥勒をいふ、契沖云、化字の上普或遍なとの字落たるへし、下の以齊済郡国と対句と対すへき句なれハなりといへり、考るに官本にハ齊の字なし、さらハこのまゝにてもきこゆへし、郡国一本邦国に作るをよしとす

故知引導雖二得悟惟一也但以世无恒質所以陵谷更變人无定期所以壽夭不同撃目之間百齡已盡申臂之頃千代亦空

陵谷更変ハ詩に高岸為谷深谷為陵とあるより、世の移りかはるをいへり、撃目ハ荘子に目撃而道存矣とあり、申臂ハ同書に交一臂而失之といへるより、須臾の間のたとへ、目撃を撃目とし、交臂を申臂とかへたるハ文章の常也、亦一本且に作る

旦作席上之主夕為泉下之客白馬走来黄泉何及隴上青松空懸信劔野中白楊但吹悲風

白馬ハ白駒の隙を過るといふよりいでて日月のはやきを云、信劔ハ季札か徐君の冢に剣を懸たると云、委しくハ史記にみえたり、白楊ハ墳墓に植るものにて、古詩にもあまた見ゆ

是知世俗本無隱遁之室原野唯有長夜之臺先聖已去後賢不留如有贖而可免者古人誰無價金乎未聞獨存遂見世

終者所以維摩大士疾玉體于方丈釋迦能仁掩金容于雙樹。維摩病を方丈の室に現し、釋迦沙羅樹の下にて涅槃を示しさるをいふ、内教曰。不欲黒闇之後来莫入徳天之先至。徳天者生也、黒闇者死也、故知生必有死。死若不欲。不如不生。況乎縱覺始終之恒數。何慮存亡之大期者也。内教ハ聖行品の黒闇徳天のことによる也、不知ハ不如の誤

俗道變化猶撃目。人事經紀如申臂。空與浮雲行大虚。心力共盡無所寄。俗道俗種本世道に作る

老身重病經年辛苦及思兒等歌七首 長一首 短六首

靈剋内限者。謂瞻浮州人壽一百二十年也 平氣久 安久母阿良牟遠。事母無裳無母阿良牟遠。世間能宇計久都良計久伊等能伎提。

たまきはるうちのかぎりは。たひらけくやすくもあらんを。こともなくもなくもあらんを。よのなかのうけくつらけく。いとのきて

痛伎瘡爾波鹹塩遠灌知布何其等久。益益母。重馬荷爾表荷打等伊布許等能其等。老爾弖阿留我身上爾。病遠等加弖阿禮婆。晝波母歎加比久良志。夜波母息豆伎阿可志。年長久夜美志渡禮婆。月累憂吟比。許等許等波斯奈奈等思騰。五月蝿奈周佐和久兒等遠。宇都弖弖波。死波不知。見乍阿禮婆。心波母延農。可爾可久爾思和豆良比。

いたききずにハからしほをそゝくちふがごとく。ますますも。おもきうまにうはにうつといふことのごと。おいにてあるわがみのうへに。やまひをらくへてあれハ。ひるハもなげきくらし。よるハもいきづきあかし。としながくやみしわたれバ。つきかさねうれへさまよひ。ことことハしなゝとおもへど。さばへなすさわぐこどもを。うつてゝは。しなんしらず。みつゝあれバ。こゝろハもえぬ。かにかくにおもひわづらひね

能美志奈可由

のみしなかゆ

たまきはる枕詞、まへくは長く喪の字を用ひ、ざりひろきとこゝにても常は喪の借なるべし、つゝみなく、神代紀最悪不順教養とこゝ、此最悪をもとつゝみと訓、是のきてとなむ、痛き瘡には鹹塩とく、上の沈痾自哀文に諺曰とくかる詞也、ふきゝる者にもく、[illegible]の数つまんとせるかたにハひとしこづけとこそもてんとまする同じ、倍は小りくとうつ中巻のとうつるぞいふハ通ずる也、老にてあるハ老去るゝ也、やみしのしハ助辞、夏吟し、本今に化、一本吟に作るよれも、こゝくハ[illegible]、悲のさまあらて、其事に[illegible]きなき子をおもしめ[illegible]の辛苦の[illegible]ハ[illegible]なんと[illegible]、さぶくる[illegible]、うつてハそうちはてハえ、[illegible]の[illegible]なれば、[illegible]ハ[illegible]てハ、[illegible]なぬ

いはずとえんがゆへぬハ、書一にはしてやき所焼我不持しとは[illegible]用じならぬハなくる也

反歌

奈具佐牟留心波奈之爾雲隠鳴往鳥乃祢能尾志奈可由

なぐさむる心はなしにくもがくれなきゆく鳥のねのみしなかゆ

鳴行鳥の如く音をなくと也

周弊母奈久苦志久阿禮婆出波之利伊奈々等思騰許良爾佐夜利奴

すべもなくくるしくあればいではしりいなゝとおもへどこらにさやりぬ

たとへいのちもいなんとおもへどもこの子らにさへらるゝとなり、さやるハ

よつるむ

富人能家能子等能伎留身奈美久多志須都良牟絶綿良波母

こゝびとのいへのこどものきるみなゝくらもつらんきぬわゝらハも

富人のわか子ハきるべきこのよくなくて衣ハ久しきをきる事をいふ

いつわるべし。くらしハ腐しく絶ハ袍の假ちかるべし此あし次の歌も

のあハ貧窮問答の反歌のまぎれてこゝに入るなるべし

麻衾能。布衣遠陏爾伎世難爾。可久夜歎敢。世年周弊遠無美

あらたへのぬのきぬをだにきせがてにかくやなげかんせんちべをなみ

あらたへハ布のおやてる名也

水沫奈須。微命母。栲縄能。千尋爾母何等。慕久良志都

みなわなすもろきいのちもたくなわのちひろにもがとねがひくらしつ

水のあわのあわくとく

倭文手纏。數母不在。身爾波在等。千年爾母何等。意母保由

留加母

しづくまきかずにもあらぬみはあれどちとせにもがとおもほゆるかも

しづくまき枕詞

去神亀二年作之但以類故更載於茲

うゝた天平五年六月右の歌一首ハ紀哥三首を作らく此一首も同じ
たしづくまきゝの一首ハ神亀二年によみし

歎るればこゝに載らるよしいふ

天平五年六月丙申朔三日戊戌作

戀男子名古日歌三首 長一首 短二首

世人之。貴慕。七種之。寶毛。我波何為。

よのひとのたふとみねがふなゝくさのたからもわれハなにかせむ

和我中能。産禮出有。白玉之。吾子古日者。明星之。

わがなかのうまれいでたるしらたまのわがこふるひハあかぼしの

開朝者。敷多倍乃登許能邊佐良受立禮杼毛居禮杼毛
あくるあしたハしきたへのとこのべさらずたてれどもをれども
登母爾戲禮夕星乃由布弊爾奈禮婆伊射補余登手乎多
ともにたハふれゆふづつのゆふべになればいざねよとてをた
豆佐波里父母毛表者奈佐我利三枝之中爾乎補牟登
づさハりちゝはゝもうへハなさかりさきくさのなかにをねむと
愛久志我可多良倍婆何時可毛比等等奈理伊弖天安志
うつくしくしがかたらへばいつしかもひとゝなりいでゝあし
家口毛與家久母見牟登大船乃於毛比多能無爾
けくもよけくもみむとおほぶねのおもひたのむに

七くさの宝ハ金銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙、珊瑚、琥珀、又ハ金銀、琉璃、頗梨、
車渠、瑪瑙、金剛、 何せんふの下七言一句落たるか、白玉のハ玉のめく

赤星といへり、あかぼし 和名抄兼名苑云歳星一名明星此間云阿加保
之、とこのべハ床の方也、をれどもハをれの下一句考落しなるべし、ゆふづゝ和名
抄兼名苑云太白星一名長庚暮見於西方為長庚此間云由不豆々
之、表者ハ遠者の誤なるべし、をちくハなさかりと訓べし、遠く放るゝ
なり、なさかれとハ奈佐の下の我の字濁音なれバ柯の字なるべきの誤なる
なるべし、宮もる表ハものほとりといふといへり、さきくさの枕詞、土つの
かくてへバ也己が別る日がなるといふ、あしくもよくもとハよくもあ
しくもまたとらんといふ
於毛波奴爾横風乃爾母布敷可爾布敷可爾覆来禮婆世
おもはぬによこしまかぜの　おほひきぬれバせ
武須便乃多杼伎乎之良爾志路多倍乃多須吉乎可氣麻
むすべのたどきをしらにしろたへのたすきをかけま

我ノ下例衍文ナレハ除 久都ヲ都久ニ誤

蕤鏡手爾登利毛知手天神阿布藝許比乃美地祇布之手
そかゞみてにとりもちてあまつかみあふぎこひのみくにつかみふして
額拜可加良毛可賀利毛神乃末爾麻仁等立阿射里我
ぬかづきかからずもかかりもかみのまにまにとたちあざりわが
乞能米登須臾毛余家久波奈之爾漸漸可多知久都保里
こひのめどしましくもよけくはなしにやゝやゝにかたちくづほり
朝朝伊布許登夜美多麻伎波流伊乃知多延奴禮 立乎杼利
あさなさないふことやみたまきはるいのちたえぬれたちをどり
足須里佐家婢伏仰武禰宇知奈氣吉手爾持流 安我古
あしずりさけびふしあふぎむねうちなげきてにもたる あがこ
登婆之都世間之道
とばしつよのなかのみち

おもひぬはおもはざるゆゑ、横風乃の下十字よみがたし、宣長いはく
横風乃の下布敷ハ尓波の誤にて、尓母ハ乳にて横風乃の下へ入るべし、下の布敷
可尓ハ二本なるべし衍文なり、横風乃尓波可尓母覆来礼婆とあるべしとある
べしといへり、たなきハたつなるをいふ、襷とかけてハ神をいのるさまなるべし、咳よ
いつくしみのことハ、紀ニ叩頭とこいのむと訓り、かゝらずもかゝりもとハ、
神のみ恵みかからんもかからざらんも神のまにまにと、たちあざりハあゆみ
まはりてたちさわぐと作るもおなじこといへり、我の下ん、下例の字をと
一本のまゝよれど、かくら久都とあり、本都久とあるハ誤なり、くつほりといふ
崩をいふ、因てたえぬれハ、たえぬれバ也、たちをどり、芳九浦名也、
なとよめるおなじ、たちをどりあしずりさけび伏してあふぎまろびをするさまにしつゝ
ふせし、まなこぐるあがことばしつ、掌珠一顆児三歳といへるもあはれなるお
もむきとしゆらしんやうにおぼゆるなん

反歌

和可家禮婆道行之良士末比波世武之多敝乃使於比弖登保良世

わかければみちゆきしらじまひはせんしたへのつかひおひてとほらせ

まひは幣の事と訓てまひはせんといふ。したへの使はした方にて、紀に根国底国をかいて同じく黄泉をいへり。神代紀一書素盞嗚尊曰云々蒼生奥津棄戸将臥之具云々。棄戸此云須多杯とあるもそれなり。幼子の稚くて道もしらねば黄泉の使負て行けよといふにて、しらせはこれを延いふ也。光仁紀左大臣藤原永手薨時の詔に美麻之大臣罷道母宇之呂軽久心母意太比尓念而平久罷止富良須倍之とあり。

布施於吉弖吾波許比能武阿射無加受多太尓率去弖阿麻治思良之米

ぬさおきてわれはこひのむあざむかずただにゐゆきてあまぢしらしめ

布施はぬさと訓べし。みなもふせとも訓べきか。こはそのむかしいへるは仏にそなへ神に奉るといふ事なるれば幣といひて布施といへるを、施と絁の誤にして、ふし(臥)おき(起)てとよめるは非なるべし。あざむかずてただにゐゆきては經文に説ける如く欺くことなく、直にたよへひきゐ行かへと之、天も六道の一つなる故にあまぢとはよめる

右一首作者未詳。但以裁歌之體似於山上之操載此次焉

是も後人の書加へしにて此者憶良の家集と見ゆれば自らの名をかざらしめるしたるべし

萬葉集巻第五

010190519169